
十人十色の恋愛事情

武村 華音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十人十色の恋愛事情

【Nコード】

N2553F

【作者名】

武村 華音

【あらすじ】

恋愛は十人十色。第1弾はちよいとシリアス。第2弾はコミカルっぽい暴走女子高生が我が道を行く。03/03完結です。

有紀一（前書き）

第一弾、二十二歳フリーターの女の子のお話。

有紀―1

私、仲根なかね 有紀ゆき。

二十二歳のフリーター。

実家で親の脛を齧りながら自由気ままな生活をしている。

私のバイト先は喫茶店。

昼間は殺人的な忙しさだが、ピークを過ぎれば閑古鳥。

「有紀ちゃん、お疲れ。一服しようか」

マスターがにこやかに手招きする。

マスターは野中のなか 卓すくもさんという三十三歳の中肉中背男性。

優しくていい人なんだけど、つつい一定の距離を取ってしまう。

それは髭のせいだ。

私はそもそも髭というものが嫌いなのだ。

そうじゃなくても、飲食店で髭ってどうなの？　って思ってしま
う。

そんな店に勤めるなって言われたらそれまでなんだけど、この店
は土日祝日が定休日という社会人彼氏対応型の店だったんで辞めら
れないんだよね。

まあ、彼氏なんてのはいないんだけどさ。

だけど、このマスターは意外にも似合っていたりする。

鼻の下で綺麗に手入れされた口髭は不潔さや下品さを感じさせな
い。

髭嫌いな私がそう思うんだから相当似合ってると思う。
お客からの苦情も一度もない。

一見そんなにモテそうなルックスをしているとは思えない。
特別カッコいいわけじゃないし、身長だって多分百七十センチ
ちょっとだろう。

カウンターの段差で十センチほど高く見えるが実際はその程
度だ。

でも……。

会社が昼休みになるとOLさん達がやって来るのは間違いなくマ
スター目当て。

私自身、そんな男が気になってしまっているのも事実。
理想像とはかけ離れた男なのになぁ……。

店の看板を準備中にひっくり返して、カウンターに腰掛けるとマ
スターがウインナーコーヒーを淹れてくれた。

ここで働き始めて既に二年。

マスターは私の好みを熟知している。

「ご飯は何かいい？」

「ジャンバラヤ」

「スパイシーなの好きだね、有紀ちゃん」

マスターは嫌な顔する事無く厨房に入っていく。
このメニューは全てマスターが調理するのだ。

「マスターの作るジャンバラヤが美味しいの。他の店のなんか食べ
れないもん」

「有紀ちゃん仕様で作ってるし、口に合わなきゃ困るんだけどね」

私はカップを口に運びながら苦笑する。

料理が出来て、細かい気配りが出来て、だからと言って口煩い事もなく絶妙な距離感を保ってくれる。

これで髭がなければいいのに……。

って……問題はそれだけじゃないんだけど、ね。

「たっだいまぁ！」

準備中の札を無視して店の扉を開け、黒いランドセルを背負った少年が元気よく入ってきた。

「お帰り、純」

マスターが厨房から顔を覗かせて優しい笑みを向ける。

そう、この少年の名は野中のなか 純じゅん。

小学一年生の七歳児でマスターの息子だったりする。
ちなみにマスター達の住まいは店の上だ。

「純君、学校には慣れた？」

「うん、友達もいっぱいできたよ」

人懐っこい笑顔で答える純君は可愛い。

「ねえ、宿題やったら公園でサッカーしてきてもいい？」

「公園はボールとか駄目なんじゃないのか？」

「中央公園はいいんだよ」

私の隣にちょこんと座って、ランドセルから宿題と思われる計算ドリルとノートを取り出す。

プラプラと足を揺らしながら鼻歌を歌い鉛筆を握る純君を私は微笑みながら眺める。

「有紀ちゃん、答え教えて？」

上目遣いでお願いしてくる純君に、私は頬杖を付きながら左手を差し出す。

「指を貸してあげるから自力でやりな」

「意地悪」

「意地悪じゃないよ、自分でやらなきゃ意味がないから言ってるの」

純君は唸りながら私の指と自分の指を駆使して問題を解いていく。

「お待ちせ有紀ちゃん」

マスターがいい香りを漂わせる皿を持ってやって来た。

「いつもゴメンね」

マスターは申し訳なさそうに言うけれど、純君が好きな私としては全然苦でもない。

特別子供好きというわけではないけれど、懐いてくれる純君だけは純粹に可愛いと思えた。

この親子は私にとって特別なのだ。

マスターが気になるからとかそんなのを抜きにしても純君を可愛

いと思える。

本当、不思議な親子。

純君にオレンジジュースを出し、自分用にも何かを淹れたマスターは、純君の隣に腰掛ける。

「有紀ちゃんご飯だからパパの手使いな」

マスターはそう言って純君に手を差し出した。

こんな時間がとても幸せでいつまでも続いてくれればいいのに、なんて考えてしまう。

私って嫌な奴……。

マスター特製のジャンバラヤを平らげて、ウィナーコーヒーも飲み干した頃、純君の宿題も終わった。

マスターは私と同じものを飲んでいたらしく髭に生クリームのがくっ付いている。

気付いていないらしい。

それがおかしくて私は純君の腕を肘で突いて目で合図した。

マスターの顔を見た純君が大きな声で笑い出す。

「何? どうした?」

私と純君を交互に見ながら戸惑うマスター。

私は笑いながらカウンターの上の紙ナプキンを一枚引き抜いてマスターの髭に付いたクリームを拭いた。

「マスター子供みたい。髭のある人がこんなもの飲んだらくっ付く

に決まってるじゃん」

拭き終わった紙ナプキンを手でクシャクシャと握りしめると、純君が私を見上げた。

「有紀ちゃんってパパのママみたいだね」

子供の無意味な言葉だと分かってるのに、私はその場で顔を引き攣らせて固まった。

「こら、純。有紀ちゃんに失礼だぞ」

マスターが純君の頭をクシャクシャと乱暴に撫で回す。

「パパが髭に泡なんかくっ付けてるからだよ。それカッコ悪い。ね、有紀ちゃん？」

「うーん、カッコイイとは思えないけど……可愛い、かな？」

私の言葉にマスターが赤面した。
面白いくらいに真っ赤だ。

「パパ、トマトみた〜い」

「林檎みた〜い」

純君と私はマスターの顔を見ながら再び笑う。

「イチゴ！」

「ん〜人参？」

「それ赤じゃないよ〜」

「あぁっ！ 負けたぁ」

私と純君の言葉遊び。

マスターは苦笑しながら立ち上がった。

「何の勝負かな、今日は？」

「マスターの顔を赤い食べ物に例える勝負」

「何だかなあ……」

後ろ首を擦りながらマスターは店の扉を開けて準備中の札を営業中に変えた。

それを見て私も食器をカウンターの中に運んで手早く洗った。

「じゃあ、中央公園に行ってくるね」

「五時までに帰ってくるように」

店の入口でマスターと純君が指切りをしている。
端から見ても仲のいい親子だ。

「有紀ちゃん、行ってきまあす！」

「いってらっしゃあい」

店の中を覗きながら元気に声を掛けてくれる純君に、私も同じように返す。

「純は有紀ちゃんにべったりだからなあ……」

マスターは店の扉を閉めて苦笑した。

「あ、もしかして私嫉妬されちゃった？ すみませんねえ、大事な純君を虜にしちゃって♪」

食器を洗い終えた私は、そんな冗談を飛ばしながらダスターでカウインターテーブルを拭く。

「あいつ有紀ちゃんには懐いてるけど、凄く人見知りなんだ」
「へ？」

マスターの言葉に私は持っていたダスターを落とした。

「誰が人見知り？」

「純」

「うっそお?! 私、最初から普通に話してたよ？」

警戒された覚えもない。

もし、警戒されてたら私は純君を好きにはなれなかっただろう。

「それが不思議なんだよね、担任の先生にも懐かないのに何で有紀ちゃんだけは懐くんだろう？」

ちょっとだけ期待しちゃってもいいのかな？

落としたダスターを拾い、トイレ脇の水道で洗っていると店の扉が開いた。

「いらっしゃいませ」

ギュッと絞ったダスターで手を拭いて振り返ると最近では見慣れた男性が立っていた。

「仕事サボりか？」

「んにゃ、ちよいと休憩。アイスカフェオレ頂戴」

この男性は野中^{のなか まなぶ} 学さん、確か三十歳。
純君の通う小学校の先生だったりする。

マスターと似たような身長と体型。

顔の作りも似ているが髭はなく、シルバーフレームの眼鏡を掛けている。

名前と年齢からお分かりだろうが、マスターの弟だ。
マスターはいつも彼を“がく”と呼んでいる。

「相変わらずやる気ない教師だなあ」

「子供達のパワーに付いて行くのがどれだけ大変か知らないから言える台詞だよな」

「これでも一児の父なんだけど？」

「一対三十で一日相手した後、その台詞が言えたら尊敬してやる」

マスターは苦笑しながら学さんの目の前に紙のコースターを置いてアイスカフェオレを乗せた。

「学^{がく}は根性が足りない。何事にも真剣に取り組もうという気持ちを感^{かん}じられないんだよな」

怒るでも説教するでもなくマスターは呟いた。

「ああ、俺も高校教師目指せばよかったかなあ……」

「もっと大変だろ？」

「だってさあ、聞いてくれよ。俺の連れなんかさ、聖ルチアで教師やっててその生徒とくっ付き合ったんだぞ？ 羨ましくないか

？ 若いんだぞ！ ティーンエイジャーだぞ？！」

興奮した拳をカウンターにぶつけながら同意を求める学さんにマスターは苦笑するだけ。

「それも縁だ。お前が高校教師をしたところで女子生徒から人気が集まるかどうかも定かじゃない。女子高生の方が結構見る目が厳しかったりするんだぞ？」

マスターは意外とリアリストのようで、学さんに夢を与えてやろうという気はないらしい……。

「多分その連れも苦勞したんじゃないか？ 葛藤もあっただろうし。羨ましいなんて言えるのは他人事だからだと思うけどな」

学さんはアイスカフェオレをストローも使わずに一気に飲み干して空になったグラスをマスターに差し出す。

「おかわり」

「まいど」

たった三歳差の兄弟なのに、会話だけを聞くと親子のようだ。学さんと純君の精神年齢は結構近いものがあると私は思う。

「有紀ちゃんはさあ、高校の頃学校の先生を好きになったりしなかった？」

学さんが私に話を振ってきた。

「はい？」

「だからあ、学校の先生を好きになった事ない？」

「うーん、学校の先生かあ……中学校の頃憧れた美術の先生が居ましたね」

「中学校かあ……俺中学校の先生になればよかったかも……」

今さっき高校教師になればよかったって言わなかったっけ？

マスターは苦笑するだけで何も言わなかった。

おそらくいつもの事なんだろう。

「なあタク兄、何か軽く食えるもの作ってよ」

「昼ちゃんと食ってんのか？」

「だから、子供の相手してたら疲れるんだって。昼飯はすぐに消化されちゃうし今腹ペコなわけよ、分かる？」

「有紀ちゃん、アイスカフェオレお願いしていい？」

「はいはい、全然OK」

マスターは溜め息を吐いて厨房に入って行った。

「ねえ有紀ちゃん、有紀ちゃんの好みってどんな人？」

「はい?!」

「好みの男、つまりは好きなタイプ。教えてよ」

まさか貴方のお兄さんですとは言えない……。

「好きになった人がタイプなんでしようけど、一貫性ないんですよ」

「じゃあコレだけは駄目ってのは？」

「……髭」

思わず小声になってしまう。

マスターには聞かれたくない。

なら、言うなよって自分の心にツツコミを入れる私。

「じゃあタク兄は駄目なんだ？」

「はい？」

「バツ一コブ付きだけでも充分に対象外かな、有紀ちゃん若いし」

バツ一コブ付き？

……誰が？

「あっ……あの、誰の話をしてらっしゃるんですか？」

「タク兄しかいないでしょ？」

「マスターって離婚なさってるんですか？」

衝撃の事実……発覚。

有紀一（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

第二サイトの作品をこちらに少しずつ移していこうとUPを始めました。

よろしくです♪

有紀―2

「あれ？ 有紀ちゃん知らなかった？」

知らなかったも何も……。

「初耳です」

今まで確かにマスターの口から奥さんの話も聞いた事がないけど……純君の口から母親について聞いた事もないけど……幸せな家庭なんだとばかり思っていた。

「ありゃ、余計な事行っちゃったかな……」

私は学さんの目の前にアイスカフェオレを置いた。

「離婚したのは純が二歳くらいだったかな？ 俺もよく覚えてないけど」

「へえ……」

「母親が居なくなたって子供は真っ直ぐ育つんだあって、純とタク兄見てて思ったね。育児に仕事に大変なのにそんな顔もしないしさ。本人の前じゃ言わないけど、結構尊敬してたりする訳よ」

ニッコリと笑った学さんの顔は、兄弟だから当然かもしれないけど、ちよつとマスターに似ていた。

「私も尊敬してますよ？」

「でも、タイプじゃないんだ？」

「だから、好きになった人がタイプなんですってばっ」

タイプじゃないのは確かだけど、気になるのも確か。
私は学さんの言葉を否定したくて声を荒げてしまった。

「有紀ちゃん？」

マスターが怪訝そうな顔を覗かせた。

「あ、ごめんっ」

「学、有紀ちゃんを苛めるなよ？」

「苛めてないし」

べえっと舌を出した学さんは私を見て悪戯な、意地悪な笑みを浮かべた。

「なるほどねえ。実際に好きになるのと理想って違うよね」

気付かれた？！

私は恥ずかしくて意味もなくシンクを洗い始めた。

「ほい、お待たせ」

「お、サンドイッチ♪ トマト入ってない？」

「入れてない。まったく……いつまでも子供だな、学は」

二人の会話が遠くで聞こえる。

私の頭の中はさっきの学さんの言葉で埋め尽くされていたのだ。

その日の晩、夕食を摂りながら私は母に尋ねた。

「ねえお母さん、バツ一子持ちってどう思う？」

突然の私の質問にお母さんが噎せ込む。

「あんたそんなのと付き合ってるの?!」

そんなのって……酷くない？

「ううん、付き合ってる。ただ訊いてみただけ」

母はあからさまに安堵の色を浮かべる。

「どう思ってたって言われたら、あんまりいいイメージはないわね。バツが付くからには何かあったんだろうし。まあどっちに非があったのかは分からないけど」

「やっぱそうだよねえ」

私は溜め息を漏らしながら皿の上の粕漬けを摘んだ。

「その人がどうしたの？」

「ん〜？ 不思議な親子でそういう人が居たから訊いただけ。深い意味はないよ、ご馳走様」

私は使った食器を持ってキッチンに向かった。

「離婚って片方が原因でするものじゃないと思うのよ。些細な事の積み重ねってのもあるし、相手だけが悪いって事はほとんどないと

思うの」

「お母さんは深い追求をしてこない代わりにそんな言葉を吐いた。

「子供を引き取らない母親ってどう思う？」

私は新たな質問を投げた。

離婚しても子供は母親から離れないものだとは私は勝手に思い込んでいたのだ。

なのに、マスターは男手一つで純君を育てている。

学さんは離婚だと言った。

死別じゃない。

母親は生きてるって事だ。

「そういう家庭もあるわよね。母親が育児ノイローゼになって子供を嫌っちゃったり、幼児虐待とかも今は問題視されてるし。他にも経済面の理由から子供を手放さなくてはならなかったり……手放さなきゃいけない状況ってのもある事だけは知っておく必要があると思うわ」

マスターの奥さんはどうだったんだろう？

今でも会いに来たりしてるのかな？

私は食器洗いのスポンジをギュッと握りしめた。

「はい、Resting timeです」

店に掛かってきた電話を受けるのも私の仕事の一つ。
だけど、そのほとんどがマスターの私用の電話。
正直あんまり出たくないけど……調理なんて出来ないし、代わってあげる事もできないから仕方ない。

『大田 ちなみといいますけど、野中に代わって下さらない？』
「少々お待ち下さい」

女の人からの電話……。

「マスター、電話」

「誰？」

「大田 ちなみさんだって」

できる限り平静を装ったつもりだけど声が震えた。
マスターは彼女の名前を聞いて表情を硬くした。

「……もしもし」

いつもよりもワンオクターブ低い声。
初めて見る険しい表情。

「いい加減にしてくれ。そういう電話ばかりしてくるな……分かった、時間は作る。都合が付き次第連絡するから」

マスターは受話器を下ろすと共に大きな溜め息を吐いた。

「マスター、大丈夫？ 顔色悪いよ？」

無関心なふりをする事なんか出来なかった。

「ああ、うん。大丈夫」

私と視線を合わせる事もなく、無理やり笑顔を貼り付けてマスターは厨房に入って行った。

その奥にある勝手口が開いた音が聞こえる。

マスターは基本的に煙草を吸わない。

だけど、時々勝手口から出て行って煙草を吸っている事を私は知っている。

意味の分からないクレームをつけてくる客が居たり、純君絡みで何かがあった時がほとんどだ。

いつもにこやかなマスターだけど、本当は感情を笑顔で隠してるんじゃないかって思う。

爆発しそうになると煙草でその怒りや不安や苛々を抑えてる気がする。

学さんからマスターが離婚しているという話を聞いてからもう二ヶ月。

穏やかだった季節は暑い夏を迎えていた。

店の外では蝉が騒音としか思えないようなボリュームで鳴いている。

店に入ってくる客は気持ち悪いくらい大汗を掻いていて、差し出すお絞りで顔を拭くサラリーマンが続出。

陽にも焼けるし、嫌な季節。

今日の電話も嫌だけど、それだけじゃなくて……何だか嫌な予感がした。

もっともっと夏が嫌いになるような大嵐が迫ってきそうな感じ。

私はこのまま何も起こらず過ぎ去ってくれる事を願わずにはいられなかった。

有紀一2（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

今更だけど、このお話 全8話 です。

8日連続更新しますのでよろしくどうぞ。

有紀一3

最近マスターの様子がおかしい。

笑顔で接客しつつも心ここに在らずって感じ。

気のせいかもしれないけど、純君もマスターの変化に気付いている気がする。

子供ってそういう変化に敏感だってお母さんに聞いたことがある。

世間では夏休み。

なのに、この店が開いているせいで純君はどこにも遊びに行けない。

定休日は土日祝日なんだけど、今のマスターが純君を何処かに連れて行ってあげるなんて難しいと思う。

昼間の忙しい時間帯は仕事の事以外考える余裕がないけれど、ピークを過ぎてしまうと店と同様マスターの心まで空っぽになる。

いつものように三時に純君が上の自宅から店へと下りてきた。
おやつ時間だ。

「何か、パパ変だよね……？」

純君が私のエプロンを引っ張って呟いた。
マスターに気付かれないくらいの小さな声。

やっぱり気付いてたんだ……。

「夏休みになってからパパ、夜になるとお酒飲むんだ」

カウンターの椅子に腰掛けてボーっとしてるマスターを、純君が寂しそうな眼で見つめている。

純君が降りてきた事にマスターは気付いていない。
この二年間、そんな事は一度もなかったのに……。

「いつもは飲まないの？」

「うん、パパお酒嫌いだって言ってた」

お酒が嫌いなのに、毎晩飲んでるって……どうしちゃったんだろう？

いや、そんな事よりも純君に心配させちゃ駄目じゃん。
父親として問題だよ。

「マスター、純君の今日のおやつ何？ 準備するから教えて」

私の声に大きく肩を震わせたマスターは慌てて立ち上がった。

「純、降りてきたら声掛けてって言っただろ？」

怒ってるわけではないだろうが、その言葉に腹が立った。

でも、純君の目の前。

まだ我慢、我慢……。

私は拳を握り締めた。

純君は無言で俯いている。

泣きたいのを我慢してるのかもしれない。

そう思うと一層腹が立つ。

マスターがおやつの皿をカウンターに置いた。

だけど純君は、いつもなら喜んで飛びつくおやつにも笑顔を見せない。

こんなに心配してる純君に何で気が付かないの？

「ねえマスター、明日何処か出掛ける？」

私はいつもの口調で尋ねた。

「いや……予定はないけど？」

「じゃ、純君借りてもいい？」

純君もマスターも意味が分からないと書かれたような顔で私を見る。

「せっかくの夏休みだもん、出掛けたいよね、純君？」

「うん！」

純君は私の言葉に笑顔で答えた。

そうそう、見たかったのはこの笑顔。

「って事で明日純君とデートさせて？」

嫌だとは言わせない。

若干睨みの入った眼でマスターを見ると、何故か困惑している。

「……それならば、日曜日にお願いできないかな？」

「は？」

どっちだっていいじゃん。
何で日曜日なの？

「実は日曜日に予定があるんだけど……純を連れて行こうか悩んで
たんだ。日曜日にお願ひできるなら安心して出掛けられるかなって
……」

純君は連れて行きたくないって？

一体何しに出掛けるっての？

息子がこんなに心配して元気がないってのに気が付かないほど何
を考えてんの？

「いいよ、日曜日ね。突然駄目だって言っても認めないから」

私は純君の頭を撫でて微笑んだ。

「日曜日どこ行こうか？」

「ポケ●ンの映画観たい！」

「O K O K、任せなさい。どこにだって付き合っちゃうから♪」

苦笑するマスターを無視して私と純君は日曜日の計画を話し合っ
ていた。

「終わったあゝ」

午後十時。

店の片付けや掃除をしてようやく私の仕事が終わる。
十二時間労働だけど、しっかりと休憩貰ってるし不満はない。

いつもなら、だけどね。

今日は不満爆発だ。

器が小さいって思われたって構わない。

だって許せないものは許せないんだもん。

「お疲れ様」

私はエプロンを外し、クシャクシャと丸めて鞆の中に突っ込んだ。
純君は上の自宅で既に夢の中なのだろう。
上からは物音一つ聞こえてこない。

「マスター、あんまり言いたくないけどさ……子供の前で深酒した
り考えに耽^{ふけ}るの控えた方がいいよ。純君、凄く心配してる」

勝手口の扉に手を掛けて私は振り返った。

マスターは驚いたような顔で私を見つめていた。

「最近純君がどんな顔してるのか知らないでしょ？ 何があったの
か知らないけど子供に心配掛けるなんて最低だよ？」

「有紀ちゃん、もしかして純を誘ってくれたの……」

「私は明るくて元気な純君が好きなの。あんな顔見たくない」

元氣のない純君も、元氣のないマスターも見たくない。

「ゴメン……迷惑掛けて」

「私はどうでもいいから純君と一緒にの時間くらいちゃんと向き合って

あげてよ」

子供にあんな顔させないでよ。

私は勝手口の扉を開けて店の外に出た。

夜とはいえ夏。

湿気を帯びた温かい風が身体に纏わり付く。

「有紀ちゃん、これ……店の鍵。もし日曜日、俺がまだ帰ってなかったらこれで家の中に入れてやってくれる？」

自分はいつ帰って来るのか分からないってか？
っざっけんな！

「自分が早く帰って来ようとは思わないんだ？ 本当、最っ低！」

私は鍵を奪うように受け取って乱暴に扉を閉めた。

「純君が元気ないって言ったばっかなのに、何でそんな事言えるわけ？」

私はそんなマスターを好きになったわけじゃない。

子煩悩で優しくて気配りが出来て、何にでも一生懸命なマスターが好きなのに……。

こんなマスターなんか大嫌い！

私は預かった鍵を鞆に突っ込んで駆け出した。
家までの十五分間、何も考えずにただ走った。

家の門の前に到着した時には汗だくだった。

日頃の運動不足もあったんだろう、喉の奥のほうで血の味がしている。

「ただいまぁ……」

疲れきった顔で玄関を開けるとお母さんが驚いた顔をした。

「どうしたの？ 変なのに追い掛けられた？」

「……何で？」

「だって、そんなに汗掻いてるし……泣いてるから」

泣いてる？

私は自分の頬に手を当てた。

そして汗とは別に、次から次へと流れてくる涙にようやく気が付いた。

「うっっっ」

私は両手を握りしめ、額に押し付けながら唸って泣いた。

何の涙だか分からないけど、我慢できなくて……凄く哀しかった。

靴も脱がずに身体を丸める私をお母さんが優しく抱きしめる。

「何があったのか分からないけど、泣きたいだけ泣きなさい。ここにはお母さんしか居ないから」

お母さんの優しい声に更に泣けた。

有紀一3（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

連続投稿3日目です。

残り5日。

お付き合い下さい。

有紀一4

純君とデートの日曜日。

私は早起きして弁当を作っていた。

マスターには敵わないけど、たまには違う人間が作った物だって新鮮でいいだろうと思った。

何よりも純君に喜んで欲しい。

昨日は部屋に閉じ籠っていたけれど、純君のために私ができる事をやってあげようと思った。

マスターよりも、今はデリケートな純君の心を軽くしてあげたい。

マスターは大人だから自分で解決できる筈。

だけど、純君はまだ七歳。

そんな事できるわけではない。

「そんなに張り切っちゃって。今日はデート？」

朝からキッチンに立つ私にお母さんが微笑む。

「うん。七歳の男の子とデートすんの」

小ぶりなおにぎりを握りながら笑顔で答えるとお母さんは顔を引き攣らせた。

「危ない事やってんじゃないわよね？」

何の心配だよ？

「知り合いの息子さんだよ。今日子守り頼まれたんだ」

私は自分で吐いた “子守り” という言葉に顔を顰めた。
間違っていないのかもしれないけど、何か嫌だ。

頼まれたからするんじゃない、私がそうしたかっただけなのだ。
一言で片付けられると思って、軽い気持ちで吐いた言葉に嫌悪感を抱いた。

「映画観て、公園でサッカーする約束してるんだ」

「あんたが子守りなんて大丈夫なの？」

「平気平気！ だって私純君好きだし、純君も私に懐いてくれてるし。仕事中だって一緒に遊んでるんだから」

「七歳か……だったらお弁当にもうちよつと手を加えたら？」

お母さんは手際よく私の作った弁当に手を加えていく。

シンプルだった弁当があつという間に子供向けの弁当になった。

普通のおにぎりがサッカーボールの形のおにぎりになり、サンドイッチもお母さんの手に掛ければあつという間にアニメのキャラクターの形へと変化した。

鶉の卵も食紅を使って着色して色合いも鮮やかになりただカットしただけのきゅうりもお洒落な切り方をしたらその存在感を増した。

「お母さんって魔法使いだね。今度教えて」

「お安い御用だわ。今度好きなキャラクターとか聞いてきなさい」
「うん」

お母さんは楽しそうに微笑んだ。
器用な母を持つと心強い。

私はジーンズにTシャツというラフな格好で日焼け止めを塗り、薄っすらと化粧を施して家を出た。

まずは映画観て、公園行って軽く運動してからお弁当食べて、公園内のふれあい広場で動物と遊んで、夕方五時には送っていく。

もしマスターが居なかったら一緒にゲームでもやって帰りを待てばいい。

子供一人で待たせるなんて絶対にさせたくない。

店の裏側にあるインターホンを押すと元気な純君の声が聞こえた。

『はあい』

「仲根でーす」

『あ、有紀ちゃん?! ちょっと待ってて!』

インターホンが切れるとドタバタと走り回る音が聞こえてきた。

「慌てなくてもいいよ、ちゃんと待ってるから」

私は笑いながら声を掛けた。

「お待たせっ!」

満面の笑顔で玄関を開けた純君は寝癖の付いた髪を手で押さえながら帽子を被った。

「あれ？ マスターいないの？」

私が尋ねると純君は俯いた。

「朝起きたら居なかった……」

「え？ 朝ごはんは？ ちゃんと食べた？」

「うん、作ってから出掛けたみたい」

あの親父……！

何考えてんの？！

拳を握り締めるとその手に純君がそっと触れた。

「映画、行こ？」

寂しい笑顔だった。

「うん、行こう！ 十時四十五分から始まるから今から行けば丁度いいよ」

「うん！」

「サッカーボール持って行こうか？ 公園でやるんでしょ？」
「うん！」

純君に笑顔が戻ると私はホッと胸を撫で下ろした。

ショッピングセンター内にある映画館で、私達はポップコーンとジュースを飲み食いしながら目的のアニメ映画を鑑賞した。

正直、子供向けのアニメ映画なんて楽しくもないけど、純君の楽しそうな横顔を見てると幸せな気分になった。

自己満足だって分かっているけど……でも、やっぱり笑顔でいて欲

しいから。

「楽しかったあ！」

パンフレットを買って映画館を後にした私達は中央公園にやって来た。

「ここはボール大丈夫だって言ってたよね？」

「うん！」

「私下手だけどいい？」

「うん！一緒にやろう！」

公園に着くと私は大きな木の根元にレジャーシートを広げて荷物を置いた。

葉が青々と繁った木は大きな日陰を作ってくれていた。

日が傾いても陽に当たらなそうな場所。

遊ぶ気満々の純君を見ていると動物達と遊ぶ時間はないだろうと思っただのだ。

「有紀ちゃんサッカーしよう」

「OK〜！」

純君の蹴るボールを必死に追い掛け、純君に蹴り返す。

ただそれだけの事なのに、ボールは純君の方向には向かってくれない。

「何で純君のほうに行かないのお?!」

あまりの下手さに泣けてくる。

「有紀ちゃん、こうやってね、ここを僕のほうに向けてここにボールを当ててみて？」

近くで寛いでいる家族が私と純君のやり取りを見て笑っている。確かに、子供にボールの蹴り方を教えてもらっているんだから笑われても仕方ないんだけど……。

「ほら、できたあ！ 有紀ちゃんのボール、ちゃんと僕のほうに来たよ！」

「やったあ！ 純君教え方上手〜♪」

「有紀ちゃん、休憩しようよ。お腹すいちゃった」

汗だくの純君はTシャツの裾で汗を拭った。

「あ、純君。今日はね、お弁当作ってきたんだよ」

「嘘?! 本当に?!」

「本当本当♪ 喜んでもらえるかなあ？」

私は芝生の上にレジャーシートを広げて座り、クーラーバッグから重箱を取り出した。

「開けて開けて♪」

純君は笑顔で重箱の蓋を持ち上げた。

「わあ！ すごいっ！ これアン●ンマンでしょ?! サッカーボールのおにぎりだ!」

「好きなものを好きなだけ食べて。純君に食べて欲しくて作ったんだよ?」

純君はサッカーボールのおにぎりに噛み付いた。

「おいしい！ 有紀ちゃん上手だね♪」

「もっと褒めて褒めて♪ 褒めてくれたらまた作っちゃうから」

私達はワイワイと賑やかに弁当を平らげた。

「お腹いっぱい」

「私もお……」

私達はレジャーシートにごろんと倒れ込んだ。

「食べてすぐに横になると身体がまあるくなっちゃうんだって、パパが言ってたよ？」

「毎日じゃなきゃ大丈夫だって」

「ねえ有紀ちゃん、ちよつとだけ寝てもいい？」

「ん？ お腹いっぱいじゃ眠くなった？」

「夜あんまり寝れないから眠くなっちゃった」

夜寝れない？

マスターのせい？

「いいよ、寝ちゃいな。帰る時間になったら起こしてあげるよ」

「うん、ありがと」

純君はあっという間に規則正しい呼吸を始めた。

余程疲れていたんだろう。

「まだ七歳なのにね……私でよかったらいつだって遊んであげるよ？」

私は純君の顔をそつと撫でながら呟いた。

純君はなかなか目を覚まさない。

ちゃんと呼吸してるのか心配になって幾度となく確認をした。顔を近付けて呼吸をしているか、とかお腹をジッと見ながら動いてるかとか……心音聞いてみたり、ちよつと顔を突いてみたり。

閉店した頃は物音一つしないし純君は寝てると思う。

でも、きつとマスターが部屋に帰ってくると目を覚ましちゃうんだろう。

だから、夜お酒を飲んでるのを知ってるんだ……。

純君は周囲の声にも全く動じない。

爆睡とはこういう事を言うんだろう。

安心して眠ってくれているなら、まあいいか。

でも……純君が寝ちゃうなんて考えてなかったなあ。

分かってたら本とかゲームとか持って来たんだけど……。

私は重箱の中に残っていたおにぎりを取り出して小さく千切り、餌を探して歩いているだろう鳩に投げた。

最初は驚いて警戒していた鳩も何回か投げると慣れたようで傍に寄って来るようになった。

「有紀ちゃん……何してんの？」

鳩の餌付けをしている私の背後で声がした。

「あ、おはよ純君。鳩に餌あげてたんだよ」

身体を起こした純君はすぐ傍にいる鳩に一瞬驚いたようだが、私が投げているのを見て一緒に投げ始めた。

「鳩もお腹空いてたんだね」

「そうだね」

本当は帰りの荷物を少しでも軽くしようと始めたのだが、そんな事は絶対に言えない……。

時計を見ればいい時間。

「純君、四時だ。そろそろ帰ろうか？」

「ええーっ、まだ遊びたいよお」

「また今度。遅いとパパが心配しちゃうしさ。あ、帰りにアイス買って帰ろうか？」

「うん！ パパのも買って行く！」

「そうだね、純君だけだとパパが拗ねちゃうかもしれないもんね」

私達は一緒に片付けをして店の近くのコンビニに立ち寄った。

「純君はどんなアイスが好き？」

「んーっとね、これ！」

純君が手に取ったのは “ パ ● コ ” というボトル型の二本入りアイスだった。

仲のいい親子らしいチョイス……なのか？

「パパと分けて食べた〜い」

嬉しそうな純君の顔を見て、私も笑顔になる。

会計を終わらせ、店を出て歩き出すと私達のすぐ横を車が追い抜いた。

一瞬の事だったが、助手席の人物と視線がぶつかった。

その人物は……見間違ひなんかじゃなく、マスターだった。
運転していたのは女の人……。

驚きよりも、哀しさよりも、怒りが込み上げてきた。

有紀一4（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

本日4日目。

半分です。

それではまた明日♪

有紀一5

「おかえり純」

インターホンを鳴らすとマスターが笑顔で純君を迎えた。

「じゃあ純君、またね」

「え？ もう帰っちゃうの？」

純君の寂しそうな眼に後ろ髪を引かれるが、今はにこやかに会話を交わせる心境ではない。

「ごめんね、これから用事があるんだ。また今度遊ぼうね」

マスターと眼を合わせないように真っ直ぐに純君を見つめる。

「約束だよ？」

「うん、約束」

純君と指切りをして私は背を向けた。

「有紀ちゃん」

マスターの声が聞こえたが、私は振り返る事無く家路に着いた。

純君を連れて行きたくない理由が女だなんて……。

あの時、純君は見えていなかったと思うけど、あれだけ香水の匂いをプンプンさせながら純君を迎えて欲しくなかった。

確かに、彼女とのデートも大事かもしれない。

だけど、今までは純君を優先させていた筈だ。
あんなマスターは大嫌い――――。

家に辿り着くと、私はキッチンにバッグを置いて自分の部屋に入った。

扉を閉めた瞬間視界が歪んだ。
ポタポタと滴が零れる。

「最っ低……！」

マスターに彼女がいた事が哀しいんじゃない。
純君よりも女性を優先した事が私には許せなかった。

哀しい涙じゃない。

純君の笑顔を壊したくなくて、あの場でマスターを殴れなかった
悔しさの涙だ。

「有紀？ バッグに鍵が入ってるけど、どこの鍵？」

あ、昨日預かった店の鍵。
返し忘れちゃった……。

扉に与えられる振動をダイレクトに感じながら私は涙を拭った。

「店の鍵。これからお風呂に行くからカウンターにでも置いていて」
先日もお母さんに泣き顔を見られているし、これ以上心配を掛け
たくない。

私は扉からそっと離れてタンスを開けた。

暑い日差しの中で遊んだので汗だくだ。

お母さんの足音が遠退いたのを確認して私は浴室に向かった。

「ああ……明日行きたくないなあ……」

浴室で何気なく呟いた言葉が妙に大きく感じて、思わず脱衣所に誰も居ないか確認してしまった。

明日ちゃんと話せるかな？
ちゃんと仕事できるかな？

「ああ……憂鬱」

大きな大きな溜め息が零れた。

お風呂に入って苛々やモヤモヤを洗い流した私は、何もなかったようにキッチンに向かい夕飯の準備を手伝った。

「純君、お弁当凄く喜んでくれたよ」

「あら、早起きした甲斐があったじゃない」

「うん。いっぱい褒めてくれたらまた作ってあげるって言ったら嘘くさいくらい褒めてくれた」

「……あんた子供に何言わせてんのよ？」

野菜の皮剥きをしながらお母さんと話していると家の電話が鳴った。

「あ、お父さんの帰るコールかしら？」

お母さんは手早く手を洗って廊下へと出て行った。
途端に漏れる溜め息。

「有紀、野中さんって方から電話よ」

野中？

野中って……マスター？！

私は剥きかけの野菜を放り出してお母さんの持つ受話器を奪った。

「もしもし？」

『有紀ちゃん？ 携帯に掛けても出ないから家に掛けさせてもらったんだけど、今大丈夫？』

何だか慌てているような口調だ。

「うん、平気。どうしたの？」

『純が……』

「え？」

『純が家を飛び出して……もしかして有紀ちゃんのところに行っていないかと思って』

純君が家を飛び出した？

「純君がうちなんか知るわけないでしょ？ 何したの？」
『今、話してる余裕はないんだ。ごめん』

電話はあっという間に切れた。

「何？　どうしたの？」

お母さんが怪訝そうに私を見ていた。

「今日一緒に遊んだ子が家を飛び出したんだって……」

受話器を下ろした私はそのまま玄関に向かった。

「どこ行くの？」

「探しに行く」

「有紀、財布と携帯くらい持って行きなさい」

サンダルに片足を突っ込んだ私の背中にお母さんが言った。
そのまま動けない私の代わりにお母さんが階段を駆け上がって行った。

純君が飛び出した？

何で？

どこに行ったの？

玄関の下駄箱の上にある置時計は七時になるうとしていた。
外は真っ暗ではないものの、随分と暗くなってきた。

「財布と携帯と家の鍵と、お店の鍵入れたから」

目の前に小さな見慣れたバッグが現れた。
お母さんが準備してくれたらしい。

「あ……り、がと」

私はそのバッグを受け取って家を飛び出した。

心当たりなんて全くない。

だからって放っては置けなかった。

変な人に連れ去られてないか、事故に遭ってないか、とにかく心配だった。

子供の行きそうな公園や駅、大型のショッピングセンターにゲームセンター、とにかく探し回った。

なのに、純君は見つからない。

時間だけが過ぎて、焦りばかりが募っていく。

純君を探し始めてもう二時間。

マスターからの連絡はない。

私が探しているとは思ってもいないだろう。

でも、見つかったら連絡の一本くらいはくれるはずだ。

きっと、まだ見つかってない。

私はたくさんの方が行き交う商店街の真ん中で立ち止まった。

生まれて二十二年間、私はここで生きてきた。

知らない場所なんかないはずだ。

絶対に何処かにいるんだから。

見つけてあげる、絶対に迎えに行つてあげるからね。
純君待っててよ？

気が付けば、私は小学校の前に立っていた。
小学校は当然の事ながら門が閉まっている。
電気も点いていない。

でも、私は知っている。
簡単にこの敷地内に入れる場所を。

正門を離れ、私は裏門に向かった。
コンクリートブロックの壁が途中から青緑のフェンスに変わって
いる。

その上には有刺鉄線。

私はその有刺鉄線に手を伸ばした。
一箇所の止め具を外し、そつと押すと横に伸びていた有刺鉄線は
扉のように敷地内に向きを変えた。
小学生なら知つて当然の事なのだ。
私はフェンスに手を掛け、よじ登る。

「ああ……短パンにタンクトップだったか」
今頃になって自分の姿に気が付いた。
この姿で町内を走り回っていたとは……。
今更だけど……恥ずかしい。

「取り敢えず服装より純君だ」

フェンスの上から飛び降りて転ぶ事なく小学校の校庭の片隅に着地した。

「私もお母さんと喧嘩した時よく来たんだよねえ……懐かしいなあ」

私の足は迷わず裏庭の方へと向かっていた。

小学生の “ 秘密基地 ” がある場所。

「ああ、虫除けスプレー持って来ればよかった……」

露出の多い服装で来てしまった事を少々後悔。

竹が密集して生えているその奥に子供達の秘密基地はある。

腕や首にかゆみを感じながら歩いていると、すすり泣くような声が聞こえた。

「純君、居る？」

返事はない。

でも、誰かが居るのは確かだ。

足を進めると、ホームレスの家のようなボロボロの掘っ立て小屋が見えた。

小さく動く影も見える。

「純君」

振り返った小さな影の顔部分に光るものが見える。

「有紀ちゃ……」

私は駆け寄って純君の前に立った。

抱きしめるよりも怒鳴りつけるよりも先に出了のは右手だった。

乾いたような音が響いた。

「こんな時間に何やってんの?! 凄く心配したんだよ?!」

「ごめ……さ……」

頬を押さえながら謝る純君の言葉は嗚咽に飲み込まれる。

「変な人に連れてかれたんじゃないかとか、事故に遭ったんじゃないかとか、凄く不安だったんだよ?」

私は純君を強く抱きしめた。

「無事でよかった……」

安心したせいか私の目からも涙が溢れ落ちる。

「帰ろ?」

身体を離して声を掛けると、純君は首を横に振った。

「やだ。僕は要らない子だからパパのところに居ない方がいいんだ。おうちには帰らない」

「じゃあ、ここに住むの? ご飯どうする? お風呂は? 新学期始まったらどうするの?」

一分でも早くこの場から離れたい。

でも、純君は俯いたまま動こうとしない。
……仕方ない。

「ねえ、純君」

「ん？」

「痒い」

「え？」

予想外の言葉だったんだろう、純君は目をまん丸にして私を見上げた。

「私ね、純君が居なくなっただって聞いてこんな格好で出て来ちゃったんだよね。でね、蚊に刺されてメチャクチャ痒いわけ。純君は痒くない？」

「……痒い」

「でしょ？ 取り敢えずここから離れようよ」

私は頷いた純君の手を握って歩き出した。

「今日ね、パパとご飯食べてたら女の人 came たんだ」

純君は俯きながらポツリポツリと話し出した。

「その人がね、パパと一緒に暮らしたいって言ったんだ。だから出て行行って。僕なんか要らないって」

純君が私の手をギュッと握り締める。

「パパも同じ事言ったの？ 違うでしょ？」

マスターは純君を大切にしている。
絶対にそんな事は言わない。

「その女の人が、僕なんか居なくなっちゃえて……」

フェンスの前で純君は立ち止まった。

七歳の子供がどんなに傷付いたのか、その女の方は気付いていないだろうか？

それとも分かっててその言葉を純君に投げつけたんだろうか？

「取り敢えず出よう？」

「僕……どこに行けばいいの？」

涙を零しながら純君は私を見上げる。

「うちにおいでよ。私のうちに帰ろう？」

純君の頭をポンポンと軽く叩いて私は微笑んだ。

有紀一5（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

あと3日、お付き合い下さい。

ではまた明日お会いしましょう♪

有紀一6

純君を家に連れ帰ると、お母さんは驚いていた。だけど、純君の顔を見たら何も言えなかったようだ。

「あらあら……二人とも随分虫に刺されてるのね、痒そうだわ。お風呂で綺麗にしてらっしゃい、その後薬付けてあげるから」

ようやく口を開いたお母さんは笑顔で純君を招き入れた。私は純君の背中を押して脱衣所に向かう。

「ゆっくり入っていいよ。ム●用意しとくから」

純君はなかなか脱衣所に入ろうとしない。知らない家の中で不安なのかもしれない。

その不安を和らげるには……。少々恥ずかしいが仕方ない。

「純君、一緒に入ろうか？ 私も汗だくで気持ち悪いし」

さすがにお母さんも目を丸くする。

「うん！」

純君は笑顔で私を見上げた。

いやあ、無邪気な笑顔っていいわあ……。心の中がほんわかする。

どうしても頬が緩んでしまう。

「じゃ、先に身体洗ってな。私は着替え持ってくるから」

純君が笑顔で頷いて脱衣所に入ったので、私は脱衣所の扉を閉めた。

「沼田さんのところで子供服借りてくるわね。あんたはあの子の親御さんに連絡しときなさい」

「うん」

お母さんは頭の回転が速くて助かる。

一人っ子の私の家に男の子の……それも子供の服なんて物はないのだ。

私は自分の部屋に入りバッグから携帯を取り出した。

携帯の電話帳に登録されたマスターの携帯番号を呼び出して通話ボタンを押す。

一回、二回、三回……。

五回目のコールの後呼び出し音が途切れた。

『もしもし?!』

「あ、マスター? 私、有紀です」

『ゴメン、純が見つからないんだ。急ぎじゃないなら明日に……』

「見つけたよ、純君」

電話の向こうから乱れた呼吸が聞こえる。

純君を探して走り回ってたんだろう。

『え……？』

「純君は見つけた。今うちでお風呂に入ってる」

『じゃ、今から迎えに……』

「来ないで。純君が帰りたがってないから今日はうちに泊める。その間にマスターは頭冷やしな」

『ゆ……』

「最近の自分の言動、今日純君が会った女の人は何を言ったのか、純君がどうして家に帰りたくないって言ってるのか。時間は充分あるでしょ？ ゆっくり考えなよ。純君は責任を持って預かるから」

私はマスターの返事も聞かずに電話を切った。

「さて、と。服、服！」

私は携帯をパソコンデスクの上に置き、エアコンのスイッチを入れ、着替えを用意して浴室に向かった。

服を脱いでバスタオルを巻いて入るかどうか少々悩んで……結局何も纏わずに風呂場の曇りガラスの折りたたみ扉を開けた。

純君は一人で目を強く瞑って俯き、必死に頭を引っ掻くように洗っていた。

「純君はいつも一人でお風呂入ってるの？」

夜十時には眠っているだろう純君。

朝一緒に入っているのか、夜一人で入っているのか私には分からない。

「うん、パパ忙しいから」

父子家庭で純君は我慢する子に育ったのだろう。

私は純君の後ろに立つと短い純君の髪に手を伸ばした。

「たまには洗ってもらうのもいいんじゃない？」

指の腹で優しく地肌をマッサージするように洗うと純君の手が頭から離れる。

「気持ちいい……」

鏡越しに見える純君の顔はちよつと恥ずかしそうで……でも嬉しそうに、はにかんだ笑顔を浮かべていた。

こんなことで喜べる純君が可愛いと思った。

「有紀、洋服ここに置いとくからね？」

扉の向こうに浮かんだシルエットはお母さん。

「うん、ありがとう。純君、今日は一人で寝る？ それとも私の部屋で寝る？」

「有紀ちゃんの部屋！」

「OK OK、汚いけど驚かないでよ？」

「うん、大丈夫。汚いのは慣れてるから」

私が固まると、扉の向こうからクスクスと笑う声が聞こえた。
お母さんはまだ脱衣所にいたらしい。

「二人ともお風呂から出たら、先ずリビングに来なさいよ？ ム●
用意しとくから」

「「はあい」」

緊張が解れたらしい純君を見て私は安堵の息を漏らした。

お風呂を出た私達は、冷房の効いたリビングで寛いだ。

リビングには仕事から帰って来たスーツ姿のお父さんも居た。

お母さんに痒み止めの薬を塗ってもらった純君は、ジュースを飲みながら私の両親と話をした。

純君は泣きそうになりながら、家を飛び出した理由を両親に語り、私の腕にしがみ付いた。

当然、両親も帰れとは言えず、困惑の色を浮かべる。

少し考えていた両親が、合図のように顔を合わせると小さく頷き、純君に気が済むまで居ればいいと言った。

やがて、安心したのか純君が目を擦り欠伸を始めた。

「あらあら、眠くなっちゃったわね」

お母さんは純君を見て優しく微笑んだ。

「純君、お部屋行こうか？　一緒に寝るんでしょ？」
「うん！」

私は純君と手を繋いで二階の自分の部屋に向かった。
着替えを取りに来た時に冷房を入れておいたので部屋の中は快適

空間だ。

「ここ、有紀ちゃんの部屋？」

「うん、汚いでしょ？」

「ううん、僕んちの方が汚い」

私は当然、マスター達の家に入ったことはない。

だから純君の言う “汚い” が、どのレベルなのか知るはずもない。

私の部屋は小物が多くて、汚いというよりもごちゃごちゃしている。

片付けはそれなりにやっているが、なかなかこのごちゃごちゃ感
は消えない。

小物を減らさなきゃ片付かないんだろなあ……。

「有紀ちゃん、一緒に寝よ？」

私のベッドに潜り込んだ純君は、恥ずかしいのか少々顔を赤らめている。

「うん、寝ようね」

私はベッド脇のスタンドの明かりを点けて部屋の電気を消した。

「パパ以外の人と一緒に寝るの初めてだ」

「ほんと？」

「うん」

「嫌？」

「ううん、何か嬉しい」

そう言ってもらえると私も嬉しい……。

「有紀ちゃん、僕……ここに居てもいいの？」

「うん、好きなだけ居ていいってうちのお母さんも言ってたでしょ？」

「うん」

「帰りたくなったら教えてね、送っていくから」

純君は返事をしなかった。

顔を覗き込むと何だか困ったような表情をしているので、私は純君の頭を撫でた。

「好きなだけ居ればいいんだよ。深く考えなくていいの、帰りたいって思わなかったらずっと居てもいいって事なんだからさ」

実際はそうもいかないって分かってる。

けど、今の純君を刺激するような言葉は避けたかった。

いくらマスターが心配してると言っても今の状態では無駄だし、下手したらこの家を出て行ってしまふかもしれない。

この家に居るからマスターだって安心してられるんだし、預かった以上責任がある。

「僕、パパ好きなんだ」

「うん、知ってる」

「有紀ちゃんは？」

「ん？」

「パパ好き？」

……これをどう答えろって？

子供相手だからってあんまり変な事は言えないだろう。
さて、どうしたもんか……。

「有紀ちゃん、パパ嫌い？」

そんな切なそうな眼で見ないで……。

言っ方がいいなら言ってしまいたいけど、今言ったらやっぱりマズイよなあ。

「そんなわけないでしょ？ 嫌いだったら一緒に働きたくないもん」

「じゃ、好き……？」

「そうだねえ……あ、髭がなかったら好きかも」

「そうなんだ……」

大きく欠伸をした純君は安心したように目を閉じ、やがて規則正しい寝息が聞こえてきた。

暫くその寝顔を見ていたが、両親も色々と聞きたい事があるだろうと思う、私は階下の両親の許に戻った。

「純君は寝たの？」

二人並んでテレビを見ていたらしい両親は私が扉を開けると同時に振り返った。

「うん、疲れてたみたい」

「親御さんに連絡したのか？」

「うん、迎えに来るって言われたけど来るなって言っただけ」

お父さんもさすがに困惑気味だ。

何か言いたい事でもあるのか妙に落ち着きがない。

お母さんの腕を肘で突いて何かを促している。

「どうしたの？ トイレなら行けば？」

私はあまりにも落ち着きのないお父さんに声を掛けた。

「有紀、お前……あの子の父親とは、その……どういった関係なんだ？」

「は？」

「あの子の父親とどういう関係なんだ？」

どうやら父はマスターと私の関係を疑っているらしい。

純君の口から父子家庭であることは語られているし、こうやって純君を預かっている訳だし、疑われるのも分からんでもない。

しかし、答えは至ってシンプル。

これ以外に言いようもない。

「雇用関係」

「は？」

予測していなかったのかお父さんが間の抜けたような声を出した。

「純君は私がバイトしてる喫茶店のマスターの息子さんだよ。今、小学校って夏休みでしょ？ 毎日一緒にご飯とかおやつ食べてるから仲良しなんだ」

お父さんが大きく息を吐き出した。

何を勘違いしてたんだか……。

有紀一6（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。
残り2日です。

続きは明日♪

有紀一七

翌日目を覚ますと純君の寝顔がすぐ傍にあって、一瞬驚いた。

あ、そうだ。

昨日純君を泊めたんだっけ。

じつと純君の寝顔を見ていて、マスターと似てるなあ……なんて
当たり前の事を考えたりした。

親子なんだから似ていて当然だよ。

私は純君を起こさないようにベッドを抜け出し、着替えを済ませて
そつとりビングに下りた。

「おはよう、有紀」

「おはよ、お母さん」

お父さんは既に出社した後らしく、使用後の食器だけがテーブル
の上に乗せられていた。

「純君は？」

「まだ寝てる」

現在七時。

起こしてもいい時間なんだろうけど、昨日相当なショックを受けて
いる純君を起こすのは気が引けた。

「髪梳かしてくるね」

私は洗面所に向かい、ブラシで髪を梳かし、後ろ髪を結った。
肩よりも若干長めのウェーブ掛かった私の髪は一度バレッタでサ
イドの髪を留めてから一つに纏める。

そうしないと後頭部が波立って不恰好なのだ。

「よし、OK」

ブラシを置いて洗面所を出ると、階段を下りる音が聞こえてきた。
私はリビングの前を通り過ぎて階段を見上げる。

「おはよ、純君」

「おはよう」

足を速め、下りてきた純君が私の手をぎゅっと握った。

「有紀ちゃん、今日お仕事だよね？」

不安そうに見上げてくる純君に私は苦笑した。

「うん、一緒に遊べなくてごめんね。帰って来たら一緒にお風呂入
ろっか？」

「うん！ 約束だよ？」

「うん。あ、でも遅いよ？」

「起きて待っとく」

純君を連れて行くと思ったのかもしれない。

私の言葉に安堵した純君は笑顔でリビングの扉を開けた。

「あら、純君。おはよう、よく眠れた？」

「うん！」

いつもとちよつと違う朝だけど、私は楽しく朝食を済ませて出掛ける準備を始めた。

バイト先まで十五分。

たったそれだけしか掛からない。

いつもなら通勤時間が短くてラクちんだと思うだけなんだけど……今日は憂鬱だ。

引き返していいならすぐにでも引き返してしまいたい。

グダグダとそんな事を考えながら歩いていると、あっという間に店に到着。

私は勝手口の前で溜め息を漏らした。

そして両手で頬を叩いて気合を入れ、勝手口の扉のノブに手を掛け……ようとしたら、扉が開いた。

「おはよ、有紀ちゃん」

マスターの顔色はあまり良くない。

目も充血しているし、若干目の下に隈が出来ている。

寝ずに純君の事を考えていたんだろうか？

「おはよ、マスター」

何だか顔を合わせづらい……。

「純は……？」

「まだ、帰りたくないって」

マスターは大きな溜め息を吐いて髪を掻き乱した。

「昨日、純君が何を言われたのか聞いてたんでしょ？」

「……」

マスターは口を噤んで説明を拒否している。

私に話したくないなら話さなくたって構わない。

でも、純君には納得してもらえるように説明する必要があると思う。

「別に、私は聞かなくたって構わないんだよ。ただ、純君にはきちんと説明してあげて欲しい」

マスターは私の腕を掴んで店の中へと連行する。

いきなりだったので、私は一瞬何が起こったのか分からなかった。

カウンターの椅子に強制的に座らされた私は、凄く間抜けな顔でマスターを見上げた。

「純から……何て聞いている？」

「僕は要らない子だからパパのところには帰れない。僕なんか要らないから出て行行って女の人に言われたって泣いてた」

いつも流れているクラシック音楽も掛かっていない店内は、マスターが触っている食器の音以外聞こえてこない。

この店内だけ酸素が薄いんじゃないかと思うくらい息苦しい。

マスターの手が私の目の前に伸びてくる。

紙のコースターが置かれ、その上に、アイスウィンナーコーヒーが乗せられた。

「今日は営業できないな……」

マスターはそう言って苦笑した。

「純が、昨日会った女は……有紀ちゃんが見た人と同じだよ。で、あの女は……純の生みの親」

私は弾かれるように顔を上げた。

生みの親という事は彼女が純君を産んだという事で、マスターの元奥さんという事になる。

そんな女性が、純君を要らないなんて言うの？

お腹を痛めて産んだ我が子に酷い言葉を投げつけるの？

「あいつは、俺を繋ぎとめるためだけに純を産んだんだ。当時はホテルでシェフをしていた。毎日帰ってくるのは深夜、あいつも寂しかったんだと思う。でも、俺は二人を養うために頑張ってたし、分かってくれてると思い込んでた」

何でも一生懸命なマスターだから本当にそういう気持ちで頑張ってたんだと思う。

私は黙ったままグラスにストローを差し込んだ。

「純が生まれて一年が過ぎた頃、純の身体に痣が多い事に気付いた

んだ。あいつは、純がやんちゃだから生傷が絶えないんだと言った。確かに純は元気な子だったし、俺はその言葉を疑わなかった。でもある日……棚卸しで早めに帰ったら、一人暗い部屋の中で純が泣いてた。母親の姿はどこにもなかった」

マスターは辛そうな表情でマスターを握り締めた。

「あいつは純を家に置いて遊びに出掛けてたんだ。純を連れて行くと楽しめない、自分と同じ年の友達はまだ独身で子供なんかいないって……」

子供を置いて出掛けてた？

その間純君は？

「純は何時間も家の中に一人だった。更に、遊びに出掛けて大量に自分の服を購入していて毎月多額の請求書が来ていた。あいつは俺に黙って借金してその支払をしてたんだ」

あまりにも衝撃的な話に私は言葉を失った。

「心を入れ替えてちゃんと育児も主婦もやると言ったあいつを、俺は信じた。でも、結局は同じ事を繰り返してた。もう駄目だと思った俺は純が二歳になる頃に離婚を申し出たけど、あいつはすんなり判を押してくれるような奴じゃなかった……最悪だったよ。裁判になって、純は渡さないとかわれて……」

それでも純君はマスターという。

「醜い争いをした。あいつは純を手元に置いておけば養育費という収入を得られると思ったんだろう。俺は金なんかどうだって良かった

た……ただ、あいつに純を渡せば同じ事の繰り返しになると思ったから渡せなかった。純を守るためにはあいつがどんな生活をしているのか他人に話さなきゃならなかった。恥ずかしいとかみつともないとか言ってられなかった」

マスターは純君を守る為に、当時の隣近所の人に証言を頼んだりして親権を手に入れていた。

「でも……だったら今更なんでその奥さんが出てくるの？」

「金だよ。俺と別れてからも一向に生活を改めなかった結果だ。同情する気もない」

それでも、彼女と会ってた。

純君を会わせたくない理由は分かるけど、彼女に会う理由が分からない。

「純が居てくれればそれでいい。俺は寄りを戻す気もないし、あいつに純を渡す気もない……だから有紀ちゃん、純を返してくれ……」

頭を下げるマスターの背後に人の気配を感じて、私は立ち上がった。

「聞いたわね、純君？　これがパパの本心よ」

聞きなれた声。

「お……母さん？」

勝手口から入ってきたんだろう二人は厨房から現れ、マスターをじっと見つめていた。

有紀一七（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

明日が最終日。

明日までお付き合いをお願いします♪

有紀―8

「純……」

マスターは身体を起こし振り返った。

お母さんに肩を抱かれた純君は涙を流しながらマスターを真っ直ぐに見つめていた。

「パパ、僕要らない子じゃない……?」

「当然だろ。要らないならお前を引き取らないし、学のある小学校の学区に引っ越したりはしない。お前の事どうでもよかったら仕事だって辞めなかった」

「パパ大好き」

「パパも」

マスターは純君の涙を指で拭って小さな身体を抱きしめた。

お母さんはそれを見て、ニツコリと微笑み厨房の奥へと歩いて行った。

おそらく、こんな話をしていると分かっていたんだろう。

だから、純君を連れてこの店にやって来たのだ、そうに違いない。

お母さんには足を向けて寝られないなあ……。

「昨日ね、有紀ちゃんが僕の秘密基地を見つけたんだよ」

純君が鼻を吸いながらマスターの腕の中で昨日の話を始めた。

「いっぱい蚊に刺されて凄く痒かったんだ。でね、有紀ちゃんちに

行って有紀ちゃんと一緒にお風呂に入って、有紀ちゃんママがお薬塗ってくれたんだ。夜は有紀ちゃんと一緒に寝たんだよ」

嬉しそうに話す純君とは対象的に固まるマスター……。

何ゆえ？

私は二人を眺めながらストローでグラスの中身を掻き混ぜる。

「有紀ちゃんとお風呂……？」

「うん！」

「そんなうら……」

「ね、有紀ちゃん？」

純君がカウンターにいる私に微笑んだ。

すると、純君を放して勢いよくマスターが振り返った。
気のせいか微かに頬を紅潮しているように思える。

もしかして私が居た事忘れてた？

何気にショックなんだけど？

「純君がパパのトコに戻るなら今日は一緒に入れないね、残念だなあ」

私が意地悪に言うと、純君は甘えた目でマスターを見上げた。

「パパ、今日も有紀ちゃんちに泊まってもいい？」

「駄目」

「意地悪」

「パパは昨日ずっとお前の事心配してたのに、一人だけ楽しみやがって」

マスターの両手が純君の頬をきゅっと摘んだ。

「パパは僕がう……」

「こっ……この服どうしたんだ？　こんな服持ってたのだろ？」

マスターはあからさまに話を逸らした。

やっぱり後ろめたいのかな？

それよりも純君の言葉の続きが妙に気になる。

何を言おうとしたんだろう？

「有紀ちゃんのママが貸してくれたんだ」

「ああ、うちには子供服なかったから近所の小学生の服を借りてきたの」

私はストローでグラスの中の飲み物を吸い上げた。

「あ、じゃあ……純、上で着替えて来い。その服すぐに洗うから」

マスターが純君の服を摘んだ。

「え、別に……洗濯くらいうちでやるから気にしないでいいよ？」

「いや、借りたものはきちんとしなきゃ」

「だからうちで洗うって……」

「純、上で着替えて服を持ってきなさい」

マスターは純君の背中を押しながら店の片隅にある “private room” と書かれた扉の中に純君を押し込んだ。

扉を開けると靴を脱ぐスペースと階段があり、マスター達の部屋

に繋がっている。

それ以上の事は知らないけど。

その扉を閉めたマスターが大きく息を吐く。

「純君が分かってくれてよかったね」

「ああ……そうだね」

言葉とは裏腹にその表情は疲れている。

「マスター寝不足なんですよ？ 開店時間過ぎてるし、このまま臨時休業にして寝なよ。私も帰らせてもらおうし」

顔色も蒼くなったり赤くなったり忙しいし、今日は開けなくて正解かもね。

私は飲み物を飲み干して立ち上がった。

自分が使ったものだし、自分で洗おうとグラスに手を伸ばすとグラスの感触と違うものに触れた。

マスターの手だ。

お互いに慌ててその手をグラスから離す。

「有紀ちゃん、昨日は本当にありがとう」

「どう致しまして。私も純君好きだし楽しかったよ」

「純君好きだし……か」

「うん」

マスターは苦笑しながらグラスを手を取った。

「マスター？」

今日のマスターは何か変。

「昨日、一人でずっと考えてた。ちなみの事も純の事も……でも、気が付くと全然違う事を考えてた」

私は意味が分からずに首を傾げた。

「ちなみと純と三人で生活しているなんて想像も出来ない。でも、有紀ちゃんと三人なら簡単に想像できるんだ」

「それは私が毎日ここに居るからでしょ？」

変に期待させるような事を言わないで欲しい。

「そうじゃない。純が懐く時点で運命だったんじゃないかって思った」

真っ直ぐな眼に私はうろたえた。

真剣な眼をして何を言おうとしているんだろう？

「有紀ちゃん、結婚を前提に俺と付き合ってもらえないだろうか？」
「は？」

結婚を前提に？

何なの、この急展開は？！

「純も有紀ちゃん存在に凄く救われてるんだ。母の日の絵は毎年有紀ちゃんを描いてる。純の中では有紀ちゃんは立派に母親なんだと思う」

純、純って……母親として私を求めているの？

マスターの気持ちは全然伝わってこない。

こんな告白……ちっとも嬉しくない。

「純君の母親として私を求めているんだ？　だったらお断り」

「ゆ……」

「私は欲張りなの。純君の心も欲しいけど、マスターの心も欲しいの。両方とも手に入らないなら嫌」

何だか悔しくて私はマスターを睨んだ。

こんな告白ないでしょ？

純君が大事なのは分かる。

純君と上手に付き合えなきゃいけないってのは結婚の条件になるとも思う。

でも、純君のためだけに私を望まないで欲しい。

「純君、純君って……確かに私は純君好きだよ？　でも、純君のためだからって愛のない結婚は絶対にしない」

結婚は一生の事。

純君のためだけに結婚したら、純君が大きくなった時どうなるの？
お役御免で離婚届でも突き付けられるの？
そんなの絶対に嫌！

「好きでもなかったらこんな事言わない」

「純君のためだったらマスターは言うでしょ」
「言わない」

「嘘！」

今しがた告白されたとは思えないような険悪な空気が漂う。
今、互いを睨むように見つめている私達を見ても、告白の場面だとは誰も思わないだろう。

マスターが大きな溜め息を吐いて私から視線を外した。

「有紀ちゃんはもうしたら信じてくれる？」

「今日のマスター変だよ、寝てないせいかもしれないけどおかしいよ」

寂しそうな顔で私を見ないで。
信じてしまいそうになるから。

「着替えは明日返してもらえればいいから」

私は逃げるように店を出た。

家に帰るとお母さんが不思議な顔をしていた。

「有紀、仕事は？」

「ん？ マスターが寝不足で変だから臨時休業」

お母さんは純君が居なくなっって悩んでいたと勘違いしたようだ。
すんなりと納得してくれたので私はそのまま自分の部屋に向かった。

今日はなんという日なんだろう。
好きなマスターからの告白なのに、ちっとも嬉しくない。

「純君のためとはいえ……何でそんな事言えちゃうのかな……」

男は分らない生き物だ。

付き合った人数が多くないから余計に分らない。

恋愛経験が豊富だったら彼の本心が分かったかもしれないのに。

「明日行きたくないなあ……」

そうはいつでも時間というのは皆平等に進んでしまうわけで。

私は寝不足のまま朝を迎えた。

私はダラダラと出勤準備を整えていた。

いつものようにシャキシャキ動けないのは昨日の事があるから。

「有紀、ここんとこやる気ないわね？」

「ん〜？ 何かねえ……純君の事とかで疲れちゃったかも」

それは嘘じゃない。

「休めば？ お母さん電話しようか？」

「ううん、いい。行く」

そう答えたものの、身体は鉛のように重い。

ダラダラと準備した結果、のんびりする暇もなく家を出る破目になった。

「いってきまあす」

「いってらっしゃい、しんどかったら早く帰って来るのよ？」
「分かったあ」

早く帰るなんてのは正直難しい。

あの喫茶店のアルバイトは私一人。

そう簡単に休んだり早引けしたりなんか出来ない。

この二年間休んだ事もないし。

まだ走らなければならぬ時間ではない事だけが救いだ。
これで走ったら間違いなく仕事にならない。

寝不足って結構しんどいもんなんだなあ……。

何かに悩んで寝不足になるなんて経験は今までにない。
彼氏と別れる時にだってウダウダと悩んだりしなかった。

なのに、今回はどうしたんだろう？

「らしくないぞ、有紀」

店の裏口で一人呟いて私は扉を開けた。

店内から楽しそうな笑い声が聞こえてくる。
純君だ。

こんな時間から下に来てるなんて珍しい。
一昨日の事が嘘のようだ。

「おはようございます」

厨房から顔を出すとカウンターに立つマスターの背中とその正面に腰掛けている純君が見えた。

「純君おはよう」

「おはよう有紀ちゃん」

ご機嫌な純君。

その笑顔を見ると心が和む。

「純、勉強の時間だろ。さっさと上に行きなさい」

マスターは私を見ようともしない。

やっぱり昨日のは冗談だったんだな。

悩むんじゃないかった……。

私はカウンターの内側にある戸棚にバッグを入れて振り返った。
触れてしまいそうな距離にマスターがいる。
居るんだけど……何か変。

「ん……？」

私はマスターの顔を覗き込むようにしてその異変を確認した。

「マスター……髭、どうしたの？」

ないのだ。

マスターのトレードマークの口髭が。

「剃っちゃったんだよね、パパ？」

「純は上に行きなさいっ」

マスターは顔を赤らめながら口許を手で覆う。

やっぱり恥ずかしいのかな？

でも……口髭がない方が若く見える。

純君は楽しそうに階段を上って行った。

それを見送って、扉を閉めるとマスターはいつものように私に飲み物を用意してくれる。

「座って」

「あ、うん」

カウンターに座るとマスターの顔がはっきりと見えて。

でも、何だか違和感があって落ち着かない。

「あのさ……そんなに見ないでくれないかな？」

「だってマスターの髭のない顔初めて見たから」

始めて会った時からマスターは口髭を生やしていた。

「髭がないと若く見える」

「今まではおじさんだった？」

「ううん、パパだった」

「パパだし」

「今は若いお兄さんみたい。三十代には見えないかな」

マスターはコースターを私の前に敷くと、アイスウィナーコーヒーを置いた。

「でも、急にどうしたの？」

私がマスターを見上げると、鼻の下を指先で擦りながらマスターが呟いた。

「有紀ちゃん、髭嫌いなんだって？」
「へ？」

ストローの紙パッケージを破く手が止まる。

「純がそう言ってた」
「あ、純君が……ね」

純君に話した私が馬鹿だった。

子供の口に蓋は出来ないって分かってたはずなのに……。

「昨日、有紀ちゃんに言った事は本気だよ。でも、いくら話しても有紀ちゃんは本気にしてくれないでしょ？」

「だって、嫌なんだもん。私は欲張りだから純君の心もマスターの心も両方欲しいの。片方なら要らない」

自分の吐き出した言葉に私は固まった。

今のって……何気に告白じゃない？

マスターの事好きだって言っちゃったようなもんでしょ？

そう思った瞬間、たちまち私の顔は火を噴きそうなくらい熱くな

った。

「昨日も言ったけど、俺は純のためとはいえ妥協はしない。純を幸せにしてやるのも大事だけど、俺だって幸せになる権利はあると思うから」

マスターは私の言葉を聞いていなかったのかそこを言及してくる事はなかった。

「だから、もう一度言わせて？ 俺と結婚前提でお付き合いしてくれませんか？」

「純君の……ためじゃないの？」

「俺のため」

昨日は絶対に嘘だと思った。

だけど、綺麗に手入れしていた髭を剃って再度そう言った今日のマスターを疑う事なんか出来なくて……。

「私なんかでいいの？」

「有紀ちゃんしかないよ」

さすがに恥ずかしいらしい。

手馴れているはずの作業がぎこちない。

それが何だかおかしくて、私はプツと噴き出した。

「人が一生懸命告白してるのに何で笑うかなあ……」

「だって……マスターが怪しい動きしてるから」

「そりゃ、一世一代の大勝負だから緊張もするよ」

「二度目のくせに」

マスターはカウンターにコーヒークップを置くと私の隣にやって来た。

「確かに二度目だけど、こんなに緊張したのは初めてだよ」

私の隣に腰を下ろしてカップを口に運ぶ。

ホットのウィンナーコーヒーだ。

少し口を付けてマスターは微笑んだ。

「マスター、また髭作ってる」

紙ナプキンを引き抜き、それをマスターの口許に当てると腕を掴まれた。

「嫌いな髭もなくなったし、キスしてもチクチクしないと思うけど？」

「え……？」

「純の心も俺の心も有紀ちゃんに奪われちゃったし」

しっかり聞かれてるし……。

「両方手に入ってるんだけど？」

「う……」

「有紀ちゃんからも聞きたいな」

さっきのじゃ不合格らしい。

「髭があってもなくても、私はマスターが好き……だよ？」

そう言った瞬間、マスターは満面の笑みを浮かべて接近してきた。

開店前の店の中。

クラシックをBGMに私達は唇を重ねた。

「髭があってもなくてもいいなら、また生やそうかな」
「嫌」

「え？　だって……」

「やっぱりない方がいい」

私はマスターの腕の中でクスクスと笑った。

「開店準備しようか、有紀」

意表を突かれ、呼び捨てにされ私の顔は、ボンという音が聞こえ
そうな勢いで真っ赤になった。

マスターの顔も心なしか赤い。

「俺もマスターじゃなくて名前で呼んで欲しいな」

「まだ無理」

お母さんにちゃんと話さなきゃなあ……。

いや、でも……この急展開をどうやって話そう？

私自身まだ実感ないのに……。

「あ、純が借りた服返しに行くついでに純がお世話になったお礼を
言いに行きたいんだけど、今日送って行ってもいい？」

「え？　そんな気にしなくたって……」

「ご両親にちゃんと話しておきたいし」

「うえ?!」

「有紀、愛してるよ」

マスターはそう言って再び私に口付けた。

その晩、本当に我が家にやって来た野中親子。
うちの両親が驚いたのは言うまでもない。

ただ、お母さんがマスターの人柄を気に入り、お父さんに話していた事もあるって、野中親子はうちの両親にえらく歓迎されていた。
人見知りのはずの純君もうちの両親には警戒していない。
まあ一昨日の事もあるしね。

そしてめでたく親公認のお付き合いをする事になった私達。
取り敢えずはゆっくりと前に進んでいこう。
純君とマスターの手をしっかりと握って。

私がマスターを名前で呼ぶようになるのはそれから数ヶ月後の事
――。

|
F
i
n
|

有紀一 8（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

本日最終日です。

この作品をPG12としたのは内容に育児放棄や子供を傷付けてしまう言葉を含んでいたためです。

甘々な雰囲気期待していた方々、本当にすみません。

8日間お付き合い頂きありがとうございました。
またお会いしましょう♪

— 武村 華音 —

夢一1（前書き）

十人十色第二弾。

第一弾とは全く別物です。

夢 1

「好き」

「はいはい」

私は日課である告白を今日も公衆の面前で行っていた。

私に告白されても眉ひとつ動かさず、軽く流すこの男性は林田^{はやしだ}俊哉^{しゅんや}さん。

御年二十六歳の英語教師だ。

「ハッチ、いい加減真剣に聞いてよお」

「聞いてますよ、いつも」

「だからね、好きなの。私と付き合って？」

「何度も言っているはずですよ、永田^{ながた}夢^{ゆめ}さん。生徒である以上恋愛対象外です、と」

私は毎日告白し、当然ながら毎日振られている。
それならば、と変化球を投げてみる。

「じゃあ、学校やめるから付き合って？」

「高校中退した時点で恋愛対象外です」

「何でよお」

「僕が高校教師だからです」

分かるような分からないような断り文句。

しかし、その言葉にはやっぱり躊躇の欠片もなく、私は本日八回目
目の失恋をした。

「ねえハッチ、知ってる？ 私さあ今のでハッチに告白したの四千

「回到達」

「それはそれはご苦勞様です」

「四千回祝いに何かお祝いとかない？」

「ああ、それは氣が利かずに申し訳ございません」

ハッチはにっこりと微笑んで私に茶封筒を差し出した。

「え？ 何？ 婚姻届？！」

「貴女の頭は本当にめでたくて羨ましいです」

ハッチから差し出された封筒を受け取って中身を取り出してみる。

「ん？ 再生紙？」

「はい、地球に優しくがモットーですから」

紙を広げて私は泣きたくなった。

「ハッチい……」

「はい」

「地球だけじゃなくて私にも優しくして……」

「お祝いが欲しいと言ったのは貴女ですよ、永田 夢さん」

ハッチが私にくれた物。

それは英単語の穴埋めプリントだった。

「告白回数を覚えておくよりも英単語をそのくらい覚えて欲しいものです」

ハッチは今日も惚れ惚れするような優しい笑顔で私に毒を吐く。

「あんたも大概にしときなさいよ、あんたの執着っぷりは立派にストーカーだわ」

「そんな、褒めないでよ。恥ずかしいじゃん」

「褒めてないから」

教室で英語の辞書を捲りながら唸る私を親友の望^{のぞみ}が呆れた顔で見下ろしていた。

「これやってハッチのところに持って行くんだから邪魔しないで」

「あ、間違ってる」

「え、どこ?!」

「三問目と八問目と、んゝ二十一問目と三十二問目」

望は学年トップの成績。

私のように辞書を引かずとも答えが分かっているんだから羨ましい。

「あんたさ、それ中学校の問題だって分かってる？」

「分かってない。私ひらがなとカタカナ専門の人だからアルファベツト見てもさっぱりだし」

「よく言うわ、この間カタカナの“ヲ”が読めなかったくせに」「あんなカタカナ見た事ないもん。大体、カタカナの“ヲ”なんていつ使うのよ？使わくない？」

「まあね。でもあんたが高校にいる事が不思議なのは変わらないけど」

「私も不思議だわ、本当。単なるまぐれだとは思うけど」

本当に、適当に埋めたら受かったって感じだし。

「三年に進級出来てるのも不思議だわ」

「金積んで進級してるわけじゃないよ。うちはそんなに裕福じゃないし」

馬鹿だけどころまで馬鹿じゃないとは思っている。

赤点だけは取った事がないし。

英語以外は。

「そんなに恋い焦がれるほどいい男かね、アレ？」

「アレ言うなあ、ハッチは最高なのっ！ 私にはハッチしかいないの！」

教室内で声を荒らげても誰も気にしないのは私が入学以来毎日ハッチに告白しているのを知っているからだ。

校内でハッチを見掛ければ告白に走る私を、多分全校生徒が知っている。

いいんだもん。

誰がどう思おうと、私がハッチを好きなんだから。

ボサボサ頭も無精髭も皺くちゃのスーツもヨレヨレのネクタイも全部が愛おしい。

「あんた馬鹿でも顔は可愛いから、他にいくらだって見つかると思うんだけどね、イイ男」

「ハッチ以外はカスよ、眼中！」

私は必死に穴埋めプリントを全部埋めて立ち上がった。

「次、英語なんだから持って行かなくても会えるでしょ」

「あ、そうだ♪ ハッチが会いに来てくれるんだあ」

「本当、めでたい頭」

「放つって」

校内に授業開始のチャイムが鳴り響く。

それと同時に開く教室前方のドア。

時間ぴったりに教室に入ってきたのはハッチだ。

「ハッチ、会いに来てくれたのね♪」

「いえ、授業をしに来たんです。着席して下さいね、永田 夢さん」

「フルネームじゃなくて夢って呼んで」

「最終警告です、永田さん座りなさい」

な……名前が消えた。

私はショックで席に倒れ込むように腰を下ろした。

「さあ、平和になったところで授業を始めましょうか」

そう言ったハッチはやっぱり優しい笑顔で、優しい声で……。

何だか泣きたくなってきた。

私の名前を呼ばなくなるほど嫌われちゃったのかなあ……。嫌われたくないよお……。

「先生、永田さんが泣いてますう」

「どうしたんですか、永田さん？」

やっぱり名前を呼んでくれない……。。

「ハッチが名前呼んでくれない……」

「おとなしくできますか？ 授業中は告白しないと誓って頂けませんか？」

「うん、チャイムなってからにするから……名前端折らないで」

「約束ですよ、永田 夢さん」

名前、呼んでくれたっ。

「うん！」

「はい、じゃあ授業を始めます。教科書の……」

私は涙を拭いて教科書を開く。

ハッチに嫌われたら私が学校に来る目的がなくなってしまう。

私はハッチに会うためだけに学校に来てるんだから。

あの日ハッチに会った時から私の心は奪われちゃったんだから――
――。

夢一1（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

第二弾連載開始です。

更新は……すみません、予告できません。

夢一2

「ハッチ、おっはよう！ 今日も愛してるよ♪」

「おはようございます、永田 夢さん。今日も朝からテンションが高いですね」

「そりゃもうハッチに会えるんだからテンションも高くなるってもんよ」

ハッチの前では絶対に泣かない悩まない落ち込まない。
それが私の三原則。

「貴女には悩みなどないんでしょうねえ」

「あるよ、あるってば」

失礼な……。

「何ですか？」

「ハッチが私と付き合ってくれない」

「それは悩むだけ無駄というものです」

また朝一から振られた。

「矢部さん、タイが曲がっていますよ」

ハッチは傍を通り抜けた二年生を呼び止め、チヨイチヨイと自分のネクタイを指差す。

「ハッチ、私も曲がってるの。直して？」

私はタイをわざと曲げてハッチにアプローチ。

「ご自分で直してください」

「ええーっ、やってよお」

「貴女に触ったら食べられそうで怖いです」

「食べないって、ちよつと襲うだけ」

「……」

「あ、しまった。本音が……」

ハッチは若干顔を引き攣らせている。

「ご自分で直して下さいね」

「ケチ」

「ケチで結構です」

ハッチは私の頭を持っていた本で叩いて背を向けた。

腕時計を見ると八時十分。

タイムアップだ。

これから職員朝礼だから追い回せない。

「ハッチ！」

「はい」

呼べばハッチは振り返ってくれる。

「大好き！」

「はいはい、どうも。いつもご苦勞様です」

別に挨拶じゃないよ。

想いを伝えてるだけだってば……。

「御苦労様、か……」

思わず溜め息。

いつになったら本気だって分かってくれるんだろう？
色んな意味で頑張ってるんだけどなあ。

「おっはよ、夢」

「おはよお、望」

「何々？ 今日は何回振られた？」

「二回」

「珍しく少ないね」

朝一平均四回の告白と玉砕。
二回ってのは確かに少ない。

「何でだろうねえ」

自分でもよく分からない。
けど、望は私の額に手を当てて顔を顰める。

「あんた、熱っぽいよ」

「へ？ ハッチへの熱は今更じゃん。ハッチへの恋の炎は誰にも消せないよ」

「……医者にその馬鹿さも治療してもらえたらいいのに」

「失敬な」

望に言われてから気が付いたんだけど……ちよつと肌寒い。

これは……風邪か？

家に帰ったら暖かいお風呂に入ってたくさん食べて薬飲んでさっさと寝よう。

試験前に風邪をクラスメイトにうつしたら間違いなくシメられるし、三者面談だってある。

さっさと治さなきゃ、ね。

「永田」

「はあい」

三年に進級してすぐに行われた学力テストが毎時間返却されてくる今日。

点数そのものは悪くない。

「頑張ったなあお前」

そう言って返された答案用紙はバツ一つ。

「これ、何でバツ？」

「答えが間違ってるから」

「だよねえ」

先生方はハッチにあしらい方でも教わってるんじゃないかってくらい私の言葉を流す。

そして、それはクラスメイトも同じで。

私という人間は分かりやすい上に扱いやすいらしい。

「新田」

「はい」

担任で日本史の教師の石井先生こと石ちゃんはその場で答案を眺める私を気にもせず次の子を呼んだ。

「眺めてても点数は上がらんぞ」

「だよねえ。でも丸になれて念じたらもしかしたら……」

「さっさと席に帰れ、邪魔」

「うゝっ」

「唸るな、鬱陶しい」

「みゝ」

「……次、沼野」

「はい」

石ちゃんにまでスルーされるとは……。

席に戻る際に望の席を横切るので、私は彼女の答案用紙を覗き込んだ。

うゝん、やっぱりバツがない。

他の教科も満点だったな、望は。

「望、ここの答え教えて」

「あ、惜しかったねえ」

「おまけで丸にしてくれてもいいじゃん、とか思わない?」

「思わない」

「あ、そ」

私は馬鹿だけど馬鹿じゃない。

教科別順位では結構上の方にいる……と思う。

教科に依るけど。

一番足を引っ張ってるのは……勿論英語。

英語さえできれば結構いい大学を狙える……はず、多分、きっと。

「問題は英語よね、あんたの場合」

「だね……でも、望のお蔭でいぶ出来るようになったと思う」

「点数上がってなかったら教えるのやめるから」

「いやあん。そんな事言わないでえ、望に見捨てられたら私終わりだよお……」

「お前が終わる前に、取り敢えずお喋りを終わらせてもらえないか？」

私の背後に石ちゃんが呆れながら立っていた。

望は顔を赤らめて私を睨む。

優等生の望が注意される事なんてほとんどないから恥ずかしかったんだろう。

そして、額を教科書で望に、後頭部を出席簿で石ちゃんに叩かれた。

いやあん、呼吸ぴったり。

見事に同じタイミングで叩かれるとは……。

こういう場合、どっちを押さえたらいいんだろう？

夢一2（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

できるだけ早めの更新目指します。

夢一3

「ハッチ、今日も愛してる♪」

「はいはい、毎日御苦労様です」

放課後、私はいつものようにハッチを追い回していた。

「いい加減降参して私と付き合ってよお」

「そういえば大学に進学なさるんだそうですね、永田 夢さん」

「うん、だから英語も頑張ってる。ハッチ、褒めて？」

「今回の点数もそこそこでしたね。その努力は評価します。毎日の告白と共に」

「じゃ……」

毎日の告白も評価してくれてるの?!

すっごく嬉しいんだけど?!

「頑張りを認めるのと告白を受け入れるのは全く違います。残念でした」

「林田 俊哉さん」

「何でしょう、永田 夢さん」

「好きです、私と付き合ってください!」

「すみません、無理です」

ハッチは私に頭を下げて職員室に入って行った。

「くそお、今日も駄目かあ……」

私は望に今日も十二回振られたとメールをしてみた。

『まだやってたの？ さっさと帰りなさい。悪化させたらダイスキな先生に会えなくなっちゃうわよ』

望のメールに私は肩を落とす。

まあ、期待なんかしちやいないけど。

さて、最後にもう一回告白して帰ろうかな。

私は職員室のドアを開けてハッチの席に向かった。

「ハッチ」

「まだいらっしゃったんですか、永田 夢さん。それよりも職員室に入る際にはきちんとご挨拶をしましょうね」

「あ、お邪魔してます三年の永田です、今日も大好きなハッチに会いに来ました告白させて下さい。で、ハッチ皆様からの許可も出た事だし告白させてね」

「誰も許可なさってませんが？」

「気にしない、気にしない」

「気にするのは当然でしょう？ 僕の職場なんですから」

職員室の自分の席に座っているハッチが溜め息を漏らす。

「永田 夢さん、ここはどこでしょう？」

「やっただあ、ハッチどうしちゃったの？ 自分のいる場所も分からなくなっちゃった？ 大丈夫、私の愛で治してあげるから安心して」

「それが一番不安です。ここは職員室です、分かりますか？」

「勿の論。あ、教頭先生お邪魔してまあす」

お父さんと年齢の近そうな教頭先生に笑顔で手を振ると教頭先生

も苦笑して手を振り返してくれる。

「毎日御苦勞様」

甘いよ、ハッチ。

私の恋を全ての先生が応援してくれてるんだから。

「私の告白はどこでも認められてるから大丈夫、気にしないで？
それよりも四千二百回記念、お祝いして？ あ、英語のプリント
以外で」

「それはそれは」

ハッチは鞆の中に手を突っ込んで私の掌に何かを乗せた。

「これを差し上げますから今日はもうそろそろ解放して頂けますか
？」

「仕方がないなあ。じゃあキスしてくれたら帰る」

「仕方ありませんね、では目を閉じて下さい」

私は言われるまま目を閉じてハッチの唇を待った。

チュツと何かが私の唇に触れる。

硬くて冷たい何か。

ハッチの唇ではないだろう。

周囲から笑い声が漏れている。

目を開けると、私の目の前には……骸骨？！

「きゃあっ！！」

「骸骨さんがキスしてくれましたよ、さあ帰りましょうね」

「何でそんなものがあんの?!」

「安田先生の大事な骸骨さんですよ? “そんなもん” なんて言
い方は失礼ですよ、永田 夢さん」

安田先生というのは生物の先生でイケメンだけど変わり者。

人体模型をこよなく愛していて、ハッチの隣の席はそんなものば
かり並んでいる。

自分の席で楽しそうに眺めてたり、骸骨を撫で回している姿もよ
く見掛けるから、真正正銘の変態だ。

職業病とかって言い逃れはできないだろう。

「ハッチがキスしてくれなきゃだ」

「永田 夢さん、貴女は “キスしてくれたら帰る” と仰いまし
たね」

「仰いました」

「そこは “はい” もしくは “言いました” と答えましょ
うね。誰がとは仰っていませんでしたので骸骨さんをお願いしたま
です。僕がして差し上げるわけがないでしょう?」

負けた……。

「他の先生方のご迷惑になりますから、そろそろお引き取り願え
ますか?」

「うーっ」

「僕も困るんです」

それを言われたら粘れないじゃないか。

「ハッチ」

「はい」

「好き」

「それはどうも。僕も生徒の皆さんが大好きです」

「私だけ愛してるって言って」

「この学校に通う全生徒を愛してますよ」

本日十三回目の告白も流された。

「気を付けて帰るんですよ、拾い食いしちゃいけませんよ？ 三秒ルールなんてありませんからね。知らない人に声を掛けられても付いて行かないで下さいね。声を掛けられたら子供一〇番の家に逃げ込むですよ」

私は幼稚園児か？

職員室から追い出されて、握らされた掌を開くとのど飴が姿を現した。

風邪気味なのバレちゃったのかな？

まさか……ね？

夢一3 (後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

次回更新……今週中にもう1回、かな？

夢一4

翌朝、私はベッドの中で唸っていた。

「ママの馬鹿あ……何で起こしてくれないんだよお……」
「そんな真っ赤な顔で学校行っても迷惑よ。おとなしく寝ときなさい」

夜中から本格的に寒気がして、朝にはもう自分で分かるくらいに熱かった。

私が。

悔しい……。

ハッチに会えない事も告白できない事も悲しい。
あと少ししか時間がないのに。

毎日告白しても足りない。

私の気持ちは日に日に大きくなるばかりで全然追いつかない。

私は熱でボーっとする頭で望にメールをした。

勿論ハッチ絡み。

『お願い、ハッチの携帯アドレス調べて。風邪引いてガッコ行けないのお』

望は五分としないうちに見覚えのないアドレスを送って来た。

『教頭先生情報だから確実。woody-english teacher.3-2@xxxxxxxx.ne.jp』

教頭先生に訊けるんだから凄いと思う。

さすがの私でもそんな勇氣はない。

私は望にお礼メールを送ってから、ハッチのアドレスにメールを打った。

『ハッチい、好きだよお。今日は会えないけど、明日は絶対に会いに行くから♪』

あ、しまった……。

送信してから今が授業中である事に気付く。

熱のせいで確認を忘れてしまったようだ。

まあ、ハッチの事だから持ち歩いてなんていないだろうけど。

私はハッチの邪魔にならない時間に告白をする事になっている。

誰かの質問に答えている時や、電話中、他のクラス学年の授業中、職員会議の前後等など、自分なりに考えて我慢しているとこもあるのだ。

いつも自分勝手に突進しているわけじゃない。

それでも一日平均、十回の告白をしている私は凄いのかもしれない。

失敗したなあ……ハッチに嫌われちゃうかなあ。

嫌だなあ。

わざとじゃないんだよ、ハッチ。

信じてくれるかなあ……？

落ち込みつつ目を閉じると私はそのまま眠ってしまったらしい。

目を覚ますと、枕許の携帯が点滅していた。
望かな？　なんて思いながら携帯を開くと、見覚えのあるタイト
ルに R e が付いている。

こ……これは、もしかして？

『どこでこのアドレスを手に入れたんですか、永田　夢さん？』

ハッチのアドレスに間違いなかったようだ。

今度はちゃんと休み時間だという事を確認して返信した。

『愛の力♪』

『そんなものではありません。白状なさい』

『私の恋の応援者』

『誰ですか、その愚か者は？』

『ハッチ以外の人全員？』

『話になりません。そのまま寝込んでいなさい』

あれ？

寝込んでるって何で知ってるの？

『ハッチ、何で私が寝込んでるって分かるの？　やっぱ愛の力？』
『朝八時五分までに貴女の姿を見なければ、他の先生方や生徒達が
噂します。ですから知りたくなくとも貴女が寝込んでいる事は耳に
入ります。愛の力というならば一方的なを付けて下さいね、永田
夢さん』

ハッチは病人相手にもつれない人だ……。でも、アドレス合っててよかった。

私は携帯を握りしめて再び眠った。

早く良くなってハッチへの告白を再開するんだから。

結局私は四日も寝込んだ。

熱がなかなか下がらなかったのだ。

事故らずに学校に辿り着ける自信もなかったし登校を諦める他なかった。

まあ一日は日曜日で休みだったんだけどさ。

「完治だぜい」

気分のいい朝、私は四日間親友だったベッドとお別れして、制服に着替えた。

「ママ、ご飯ちよーだい」

「あら、復活？ 学校のためにはあと一週間くらい寝込んでおけばよかったのに」

それが受験生の娘に言うセリフですか？

「いつまでも寝てられないの、時間がないんだから」

「あんたにストーリーカードされてる先生に同情するわ」

「ストーカーじゃないもん」

「似たようなものよ、一日十回も二十回も告白されたら誰だって不気味がるわよ」

「二十回もした事ないよ。それに、ハッチはそんな事思っていないから。迷惑なら迷惑だって言える人だもん」

「生徒相手には言えないと思うけどねえ」

私は朝ご飯を掻き込むように食べて学校へと向かった。

ママの言いたい事も分かるし、ハッチが迷惑がってるかもしれないなんて事は充分に分かってる。

でも、卒業まで続けさせて？

卒業と共に私もハッチから卒業できるように頑張るから。

だから後悔だけはしたくない。

私は家を出て駐車場の片隅に駐めてある自転車の前籠に鞆を突っ込んで学校に向かった。

信号待ちしている時に腕時計で時間を確認し、到着時刻を算出してハッチの居るだろう場所を予測する。

入学以来、ずっと見て来たからハッチの行動パターンは大体記憶しているのだ。

そして、八時ジャストに学校の駐輪場に到着。

鍵を掛けて鞆を持つと、私は裏庭へと向かった。

途中、石の階段を下りながら名前も知らない野花を一輪だけ引っこ抜いて。

兎ちゃんのお墓の前に見慣れた背中。

勿論、ハッチだ。

「ハッチ、おはよお♪」

元気に声を掛けると、のっそりと立ち上がりこちらに振り返る。

「永田 夢さん、おはようございます」

「おはよお、今日も大好き♪」

「早速ですか」

「そりゃあそうでしょ、無駄にした四日間分告白しなきゃだし」

「使命感で告白されても困ります」

「違うもん、四日間も告白しないでいると私の中で好きって気持ち
が溢れちゃうんだよ」

「そのまま垂れ流しにしておいて下さい」

ハッチは今日もハッチだ。

「貴女は何のために登校なさってるんですか？」

「勿の論、ハッチに告白するため。大好き♪」

「病み上がりなんですからさっさと帰って下さいね。他の方にうつ
したら呪われますよ」

ボサボサの髪を掻き上げ、身体を大きく伸ばしてハッチは私に背
を向けた。

「ハッチ」

「はい」

「好き」

「はいはい」

「本当に好きなんだってば、分かってる？」

「分かってますよ。では、失礼します」

ハッチはこちらを向く事もなく校舎へと入って行った。
今日も早速四回の告白を流された。

いいもん、くじけないもん。

私は石の傍に持って来た花をお供えして教室に向かった。

夢一4（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

次回更新02月16日頃、の予定です。

夢一5

「つの、馬鹿っ！」

「馬鹿で悪かったね、馬鹿でっ」

「小学生からやり直して来なさい！」

「小学生は英語なんかできませ〜ん」

「今は小学校でもやるのよ、あんたはそのレベルがちょうどいいんじゃない?!」

自習の教室内に望の怒鳴り声が響き渡る。

クラスメイト達も日々塾に補習にと勉強尽くしのため教科書を開いてもいない。

短い休憩時間みたいなものだ。

この学校は何度も言うけど進学校。

通常授業の後に補習という名の授業が二時間。

土曜日だって三年生は補習という名の授業が三時間あるし、試験結果が出ると、そのテストで最も点数が低かった教科の補習を受けなければならぬ。

今更ながらとんでもない高校に入ってしまったと後悔してしまう。私の性格を熟知している中学の先生方に上手く乗せられてしまったのだと気が付いたのも高校に入ってからだったっけ。

「次、（ ） there before, Mary kne
what to see. 括弧には何が入る？」

「Being, Be, Been、何これ? はびんぐびーんって読むの?」

「これくらい読めてよ……で? 何が入る?」

「Be」

「ブー」

望の持っているノートが私の後頭部で軽いい音を響かせる。

「いい音。中身入ってないといい音がするのね」

「入ってるってば」

「英語以外ね」

「うっ」

言い返せないのが辛い。

私はずいぶん前から望に英語を教えて貰っている。

お馬鹿な私に教えてくれる人なんてそうそういない。

ハッチにはさすがに訊けなかった。

恥ずかしいという気持ちもあるけど、中学の英語さえも分からない私を見られるのが嫌だったというのもある。

まあ、散々な私の答案用紙を見ればそんな事言わなくても分かっちゃうんだろうけど。

「じゃBeing？」

「ブー」

再び後頭部にノートが。

「Been？」

「ブーっ！ 消去法で最後まで正解がないってどういう事よ？」

「だって分かんないんだもん……」

「正解はHaving been、で訳すとどうなる？」

わけが分からないけど、取り敢えず単語を並べてみるか……。

「えっと、beforeは前でしょ、thereって何？ あそこだっけ？ マリー、知ってる……What to seeは、何を見る？」

「日本語にして」

「あそこは前に行ったからマリーは何を見るか知っている」

「その日本語おかしいから。ってか、マリーじゃなくてメアリーだし」

人の名前さえ読めない自分が情けない。

ってかMaryってマリー誤読しても仕方ないじゃん。

誤読されたくないやMearyって書けばいいんじゃない？

こんな低レベルの特別授業をやっているとこなんて見られたくない。

絶対に見せるわけにはいかない。

ハッチが好きだから、ハッチの担当する教科を何とかしたいと自分なりに頑張っている。

でもって、約二年間望は私専属の英語教師をやったりする。

望に見捨てられてたら私の大学合格も夢と消え、この学校には大進学しなかった生徒が出てしまって、私の名は汚点として未来永劫語り継がれてしまうんだろう。

「以前そこへ行った事があったため、メアリーは何を見ればいいのかを知っていた」

「そうそう、そう言いたかったの」

望が大きな溜め息を漏らしながら私の隣に腰を下ろす。

「でも……ま、進歩よね」

「でしょ？」

「単語の意味を随分覚えたから、多少はそれらしい訳が出来るようになったもんね」

「睡眠学習の賜物」

「は？」

「寝る時は枕の下に英和辞書敷いて寝てるから」

ふっふっふ。

最初からそうしとけばよかったとか思ってたりするんだけどね。

「家で勉強してないの？」

「してるよ。それなりに」

各教科一時間くらいずつ。

勿論、英語は二時間分からないなりにやっている。

おかげで就寝時間は日付の変わった深夜。

これくらい受験生なら当然なのか？

「睡眠学習なんて当てにならないよ、起きてる間にやった事を脳がちゃんと記憶してるの」

「それでも、こんなに英単語を覚えた私って凄くない？」

「当然の事なんだけど？」

「うっ……」

当然の事が出来ていなかった私って……。

「夢が本気になればこのくらい覚えられるのよ、単なる食わず嫌いなんだから」

「食べ物じゃないもん」

「分かってるわよ」

少しでもハッチに追い付きたい。

ただそれだけなんだけど、それでも勉強しようと思えたから頑張った。

ハッチの好きなものを少しでも好きになりたいから……。

チャイムが鳴れば私達も休憩時間。

私は勉強道具をそのままに教室を飛び出す。

「帰りにお茶買ってきて」

「はあい！」

私が向かう先は勿論、ハッチのところ。

一時間目の授業だった二年四組から一番近い階段を駆け上がるとハッチを発見。

でも、廊下に居るハッチはお話中。

二年生の質問に答えてるみたいだ。

私は邪魔をしないように階段の途中で足を止めてハッチの声だけを聞く。

「ですから、この場合はonではなくofになるんですよ、分かりましたか？」

「はい、ありがとうございました」

「いいえ、他にご質問は？」

「大丈夫です」

「そうですか。では、失礼します」

ハッチの声を聞いて私は階段を上る。

「ハッチ」

「また出ましたね、永田 夢さん」

「出ましたよ、林田 俊哉さん」

ハッチは皆に向けるのと同じ笑顔を私に向ける。

「どうなさいました？」

「好き」

「はいはい」

「結婚して？」

「僕の意味は無視ですか？」

「無視したくないから訊いてるの」

「でしたら、すみませんと言わせて頂きます」

再び二回撃沈。

「ハッチ。いい加減分かってよ、もう四千回超えてんだからさあ…」

「それはそれは。お祝いに先ほど使ったプリントを差し上げましょう」

ハッチは二年生の授業で使ったプリントを私に差し出す。
おとなしく受け取ってしまうのは、やっぱり惚れた弱みなのかも
しれない。

「これ全部合ってたらデートして？」

「それは無理というものです」

「じゃ、一緒にお茶して。学食で」

「その程度ならばお付き合いしましょう」

「本当?!」

「はい、学食でお茶ですよ」

私はプリントを握りしめて教室にダッシュした。

「夢、お茶は？」

「あ……」

望に頼まれていたお茶はすっかり頭から抜け落ちていた。

夢一5（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

次回更新……今週中にもう1回、の予定。
予定は未定ですが。

夢一6

「ハッチ、こっちこっち♪」

「お待たせしました」

ふっふっふっ。

私は自力で全問正解をしてこうしてハッチと校内デートを実現させた。

望にも絶対に訊かなかった。

チャンスをもたらったんだから、正々堂々とやりたかったのだ。特にハッチ相手に汚い手は使いたくない。

とはいえ、昼休みではなく授業の合間の休み時間を指定してくるあたりハッチらしい。

それでもこうして二人でいられる事が嬉しいので私も頷いたんだけどね。

嫌だとか言ったらこの話自体が消滅するって分かってたし。

「全問正解とは驚きましたね」

「ふっふっふっ、ハッチへの愛が本物だって事だよ」

「その執念には恐怖すら覚えます」

「ハッチ、何飲む？」

「永田 夢さんは何が好きですか？」

「ハッチ」

「……飲み物の話です」

ハッチは溜め息を漏らしながら自動販売機に向かう。

「ハッチ、私が誘ったんだから出すよ」

「永田 夢さんが全問正解を出したお祝いです。御馳走して差し上げます」

「本当にデートみたい」

「……ご自身でどうぞ。僕は僕の分を出します」

とか言いながらコインを入れて私にボタンを押すように促す。

妙に恥ずかしいけれど、お言葉に甘えてボタンを押してしまう私。

実は持って来た巾着の中に自分で買ったオレンジジュースが入っていたりするんだけど……。

私は取り出し口から紙パックを取り出してさっさと席に着いた。

そして、さっき買った物と素早く取り替えてハッチが戻って来るのを待つ。

「ハッチ、御馳走様」

「どうぞ致しまして」

ハッチは私の正面に座っていつもの笑顔。

幸せ過ぎちゃって死にそう……。

「随分と英語、頑張ってるんですね」

「うん、頑張ってるよ」

「どうして授業中に頑張れないんでしょうね」

「ハッチに夢中過ぎて授業が頭に入ってこないの」

嘘じゃない。

「僕が授業を担当しなければ良かったという事ですか？」

「ううん、ハッチが担当しなかったら嫌いなままだったし、頑張りもしなかったよ」

「言い切らないで下さい」

「本当に、ハッチだから頑張れるんだよ」

ハッチがいなかったら私は英語なんか勉強する気にもならなかっただろうし、大学だって行こうとも思わなかっただろう。

学力の問題で行けないと言った方が正しいかもしれないけど。

ハッチはちよつと困ったような顔でボサボサの髪を掻く。

「ハッチ」

「はい」

「好き」

「はいはい、どうも」

正面から真っ直ぐに見るとハッチの右目の横に一本の線が確認できる。

薄っすらとだけど。

あの日の傷痕……。

「傷……消えなかったんだね」

「そうですね。貴女の顔でなくて良かった」

「それ、ハッチの眼鏡の傷でしょ？」

「どうでしょうね」

ハッチは小さく微笑んで紙パックのカフェ俺を飲み干した。

ズズズつと音がして、ハッチはストローを抜き、その紙パックを畳む。

綺麗な指先。

指毛なんかも見えなくて、長くて綺麗。

「ハッチって指が綺麗だね」

「男にその言葉はどうでしょうか」

「手のモデルとかになれそうなくらい綺麗、ハッチの心を覗いてるみたい」

「どれだけ僕を美化なさってるんですか？」

「してないよ、見たまんまのハッチが好きだから」

「そうですか」

「そうですよ。ハッチのハッチらしいところが好きなの、私は」

ハッチは潰した紙パックを持って立ち上がった。

「プリントのコピーがありますのでそろそろ失礼します」

「え？ もう？」

「はい、時間です」

授業間の休み時間は短いから仕方ないんだけど、楽しい時間が過ぎるのは泣きたくなるくらい早い。

早過ぎる……。

ハッチがそれを狙ってるって分かってるけど、でも早過ぎるよ……。

「ハッチ」

「はい」

「好き」

「はいはい、どうも。僕も生徒としての貴女は好きですよ」

生徒としての私……か。

ハッチは自動販売機の横にあるゴミ箱に紙パックを捨てて、振り返る事もなく学食を出て行く。

だらしないスーツに少し猫背の背中。

それが遠退いて行き交う生徒達の波に飲み込まれる。

「未来永劫、女としては見てもらえないのかなあ……」

溜め息を一つ漏らして紙パックのジュースを飲み干す。

ハッチに奢ってもらったジュースは鞆の中で表面に汗を浮かべていた。

こんなに好きなのに……どうして想いは届かないんだろう？
想いを伝えるって難しいなあ……。

夢一6 (後書き)

ご覧頂きありがとうございます。

フライングで本日更新しました(^^;)

次回更新02月23日……かな。

夢一7

気が付けば九月。

校内、特に三年のフロアはピリピリしている。

異様に試験の回数も増え、学校に行くのが嫌になってしまいう今日この頃。

でも、私は今日も懲りずにハッチを追い回している。

「ハッチ♪」

「何でしょう、永田 夢さん？」

「好き」

「またですか……受験生なら受験生らしく質問にいらっしゃったらどうなんですか？」

「何、先生みたいな事言ってるの？」

「先生ですから」

確かに。

ハッチを教師として意識していなかったから時々忘れちゃうんだよね。

「大学に進学なさるなら本業である勉強をきちんとなさった方がいいですよ」

「なさってますよ」

「そこは “ しています ” と答えましょうね、永田 夢さん」

今日も日本語がおかしいと訂正を入れられてしまった。

でも、それを狙って鸚鵡返ししてるって気付いてないんだろうな。

「勉強ばかりじゃ頭がおかしくなっちゃうからこうしてハッチに会いに来るんだよ」

「僕を見ても英単語は頭に入りませんよ」

どうしても勉強に話を持って行きたいらしい。

「ハッチに会ってる間は勉強を忘れるのっ」

「そうですか」

「ハッチ」

「はい」

「好き、大好き。結婚前提に付き合ってください」

「その一途さを勉強に向けて下さい」

また振られた……。

「気晴らしも結構ですが、七十点ではまだまだ補習が続きますよ」

そんな……点数を廊下で言わないで欲しい。

「そう言えば、三井先生とお約束をしたんですよ」

「何の？」

「永田 夢さんが合格点である八十五点をクリアしたら補習を代わる、と」

三井先生こと、ミッチは英語の先生だ。

私のクラスの担当ではないんだけど、補習ではミッチのクラスに回されてしまった私。

先生方もあの手この手と考えているようだ。

絶対に先生達の陰謀だと思ったけど、私の成績を上げるためにハッチから引き離れたのか……。

先生達め、私のコントロール方法を知り過ぎだぞっ?!

ハッチじゃない分勉強に集中できるんだけど、ハッチじゃない分やる気も半減。

合格点に達したらハッチに代わるなんて聞いたら頑張っちゃうに決まってるじゃないか!

「本当?! クリアしたらハッチが手取り足取り腰取り教えてくれるの?!」

「普通にお教えます。手も足も腰も取りませんし、集団受講であって個人指導ではございませんから」

そんなきっぱり言わなくても……。

「ハッチと一緒に居られるなら死ぬ気で頑張るからっ」

「はい、頑張ってください。その死ぬ気を遠くから見物させて頂きますよ」

「いやあん、近くで見ててよお」

「近くに居ると身の危険を感じますので」

確かに。

涎垂らしながら舐めるように見てしまっただろう。

視線だけでもハッチを襲っているわけだし。

「こんなところで遊んでないで、教科書や参考書と仲良くして下さいね」

「ハッチ」

「はい」

「愛してます、結婚して下さい」
「すみません、無理です」

ハッチはいつものように私の告白を流して背を向けた。

「ハッチ」

「はい」

「今ので五千回達成」

「それはそれは。凄い執念ですね」

「お祝いちょうだい？」

「お祝いですか……生憎、何も持ってないんです」

「ハッチの唇があれば充分」

ハッチは自分の身体を触って何かないか探し始める。

そんなにキスが嫌なのか……。

「あ、お守りを差し上げます」

ハッチは胸のポケットからシャーペンを取り出して私の掌に乗せた。

「英語が少しでも出来るようになるといいですね」

ハッチは優しい眼で微笑んで階段を下りて行ってしまった。

「何ニヤけてんのよ？」

放課後補習に向かうために動き出したクラスメイト達。
私はニヤニヤしながら自分の席に留まっていた。

席替えで私の斜め前になった望は顔を引き攣らせながら私を眺めている。

「ふっふっふっ。ハッチからプレゼント貰ったのお」

「略奪したの間違いじゃないの？」

「五千回突破記念に何か頂戴って言ったらコレくれた」

シャーペンを見せると、望はそれを持って鑑定士のように凝視した。

「これ、結構な代物よ？」

「え？」

「イニシャルも入ってるし、何かのお祝いに貰った物なんじゃない？」

「……かなあ？」

望の言葉で私は一気に落ち込む。

確かに私が何か頂戴と言ったわけだし、望が言うように略奪に近いものがある。

「入試が終わったら返そっかな」

「その方がいいかもね。お守りだって一年で奉納するんだし」

望の言葉に私は頷いた。

ごめんね、ハッチ。

入試まで貸して？

終わったら返すから。

合格でも不合格でも返すから。

私はそれをハンカチに包んでポケットに突っ込み、補習の行われる隣の教室へと向かった。

夢一七（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

次回更新は今週にもう一回……の予定です。
あと少しだけお付き合い下さい♪

夢一 8

十月。

この学校では体育祭と中間テストがある。

三年にはいい息抜きでもあるんだけど、体育祭の前の中間試験は勘弁して欲しいなあ……。

しかし、嫌がる私達(?)を無視して時間は進み、あっという間に試験期間が終了。

数日後には三年の掲示板に上位二百五十人が貼り出されていた。

「どうだった？」

「んゝ普通」

この学校はおかしい。

学年トップ、つまりは満点が三十人もいるなんて……。

一問間違えただけで順位は三十番台。

二問間違えて四十ゝ六十番台。

勿論私は百番以内に入れるはずもなく……。

「二百十一番か。前よりも順位は上がったね」
「だね」

私の点数が異常に悪いわけじゃない。

三百人中二百十一って、決していい順位じゃないけど……それで
も五教科で四百六十点は取ってる。

公表されるのは二百五十位まで。

あとの五十人が公表されないのは先生達の優しさなのかもしれない。

ちなみに私の名前が載ったのは昨年からだ。

一年の時は見事に最下位を頂いて担任の先生に泣かれてしまった。その時の点数は四百点だった気がする。

この学校の赤点ラインが五十点だっているのもおかしいと思う。

「今回は二百以内だね」

「無理無理」

そして、試験結果が出ると体育祭に本腰を入れる。

体育祭はストレス発散の場でもある貴重なイベントだ。

基本的に、この学校で体力を求めるのはナンセンス。皆本の虫みたいな人ばかりだから。

でもさ、中にはいるんだよね。

文武両道っていうの？

スポーツも勉強も出来ちゃう人。

「あんだ、勉強も出来ないのにスポーツでも一番になれないの？」

呆れた顔をしている望の言葉に私は撃沈。

同級生の斉藤さんという子に勝てないのだ。

毎回。

一年の時からずっと。

私は常にタイムでも着順でも二番、練習でも勝った事がない。

「悔しいよお……」

机に突っ伏す私の頭をポンポンと叩きながら望が小さく唸る。

「林田先生の力借りたら？」

「反則厳禁」

ハッチに絡む事は全てフェアに。

それがモットーだ。

大体、ハッチに何をしてもらえっての？

「反則ではないと思うんだよね。あんたアンカーじゃない？ ゴール近くに先生が立ってるだけでスピードアップしないかなあなんて思っただけだ」

クラス全員の視線が望に向けられる。

「ハッチに迷惑掛けたくない」

「あんたが毎日告白してるのに比べたら可愛いもんよ」

そうだそうだ、という教室内の異様な団結力に私は顔を引き攣らせる。

そして次の授業が英語だったりするから困ったもんだ。

チャイムと同時に教室前方の扉が開き、ハッチが入って来た。

「先生」

学級委員でもある望が代表して口を開く。

「どうかなさいましたか、岩崎さん？」

「実は、クラス全員からお願いがあるんです」

ハッチは驚いたような顔で教室を見渡す。

クラスメイト達は拝むようにハッチに手を合わせている。

ハッチは仏様かい……。

「内容にもありますが、先ずはお話を伺いましょうか」

ハッチは教壇に出席簿や教科書を乗せると望を真っ直ぐに見つめた。

羨ましい……私も見て。

っていうか、私だけを見て欲しい。

「今度の体育祭は、私達にとって最後の体育祭ですよね？」

「そうですね。余程の事がない限り来年体育祭に参加する事はないでしょうね」

「ですから勝ちたいんです、一組に」

ハッチは天井を見上げながら、ああ……と呟く。

「永田 夢さんはいつも二番手でしたねえ」

「今年は夢を勝たせたいし、私達も勝ちたいんです」

「で？ 僕にどうしろと仰るんですか？」

「夢が走る時にゴール付近に立ってて欲しいんです」

望はニツコリとそう言って、クラス全員が赤べこのように頷く。
窓際最後尾の私から見たら不気味な光景だ。

「それは面白いですね」

即却下すると思いきや、意外にもハッチは笑顔で。

「いいでしょう。その程度でよろしかったらご協力しましょう」

クラスから歓声のような声が上がる。

「体育祭が終わってから絶対口外しない事をお約束できますか？
守れるのであれば交渉成立です」

クラス全員の息の合った返事が響き渡る。

私は呆れながらハッチを眺めていると、今まで私の事なんか見もしなかったのにばっちり視線が絡んだ。

「楽しみですねぇ、僕をがっかりさせないで下さいね。永田 夢さん」

今までに感じた事のないプレッシャーが私を襲ったのは言うまでもないだろう。

「もしも、二組が優勝したら皆さんに学食のパックジュースを御馳走しましょう」

ハッチは笑顔で一言付け足した。

クラス全員の目の色が変わったのってのも……分かる、よね？

そして、体育祭当日。

やはりというか何と言うか……一組がトップの状態で種目は進んでいた。

餌に釣られたクラスメイト達の頑張りもあって我が二組は一点差の二位。

このリレーで勝てれば逆転という、物語によくあるような状況だ。

ちなみに一位が五点、二位が三点、三位が二点、それ以下は一点という配点になっている。

「夢、頼むわよ。今年こそ優勝よ」

「超プレッシャーなんだけど？」

「気のせいよ。あんた、緊張とかプレッシャーと無縁じゃない」

「失敬な……」

普段何事にも期待される事のない私にとって、こういう期待は本当プレッシャー……。

ピストルの音が響き渡り、男子のリレーが始まった。

意外にも五組の男子がトップを走っている。

二組は三位。

一組は……八位。

クラスメイト達の応援にも熱が入る。
たかがジュース、されどジュース。

男子からそのまま女子のリレーに移るため、男子の順位はかなり重要。

女子にバトンが渡った際には一位とタッチの差程度だった。
一組は順位を上げて来ていて、現在四位。

このままいけば勝てる。
けど、上手くいかないのが世の中だ。

途中でトップの五組の子が転倒し、クラスの子が巻き込まれた。
すぐに起き上がって走り出したけど、三番手だった六組に抜かれて、更には一組との差はほとんどなくなってしまった。

「一位なら先生に抱きついてもいいって」

私の前走者である望が耳元でそう告げる。

「本当?!」

「頑張れ」

「うん! 頑張る!」

ハッチに抱きつける……。

これを頑張らないでどこで頑張る?

ふっふっふっ、今回はいただきますよ、斉藤さん。

そして望達がバトンを手に走り出すと、私を含め櫂を下げたアンカー達がスタートラインに並ぶ。

「今年も負けないから」

斉藤さんは私を見下すように笑う。

「悪いけど、今回は勝たせてもらおうから」

ハッチに抱きつける。

私の脳内はそれ一色。

私の手にバトンが触れ、それを掴んで私は全速力で走り出した。
現在二番手、一組は三番手。
一位との差はほとんどない。

「夢！ ゴール見て！」

後方ばかりを気にしている私に望の声が届く。

ゴール？

ゴールテープを手渡すハッチの姿。
私を待ってる？

そう思ったら異様に足が軽くなった。

「ハッチい！！」

六組の子を抜き去り、私はゴールに突進する。
ハッチは次の競技の準備をしながら私を見ていた。

ゴールテープを切ると同時にピストルの音が響き、歓声が上がる。そして、何故か望の声がはっきりと聞こえた。

「確保っっ!!」

ハッチに抱きつこうとゴール地点を通過しても走り続ける私を、クラスメイト達が追い掛けて来て押さえ付ける。

「ハッチい……」

「お疲れ様でした、永田 夢さん」

「ごめんねえ。さっきの嘘なんだ」

「え？」

「父兄がたくさんいる中で抱きついていいわけないでしょ。それに、何を言ってもいいけど最終的に先生を助けるってのも今回の条件だから。悪く思わないでね？」

目の前で地面に押さえ付けられた私を笑顔で見下ろすハッチ。楽しそうに笑う望やクラスメイト達。

「そんなあっっ!」

結局、二組は騎馬戦でも圧勝、父兄参加の綱引きにも圧勝。

高校最後の運動会は優勝で終わらせる事が出来た。

水面下で望とハッチが作戦会議をして、私がハッチを追い回している間にクラスメイト達に伝えていたと知ったのは、体育祭の二日後。

ハッチが気前よく全員にジュースを奢ってくれたのは職員で行っていた賭けに勝ったからだと知ったのは更に三日後の事だった。

皆、
酷いよ……。

夢一8（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

次回更新03月01日です。

ああ、もう3月なのか……。

夢一9

吐く息も白くなる十二月。

三年生フロアは皆教科書や参考書を手に勉強の話ばかり。

推薦で進路が決まった子も結構いるけど、まだセンター試験も一般に残っている。

ちなみに望も私も推薦組だ。

とはいえ、勿論望とは頭の出来が違うので行く大学も違うんだけどさ。

望は当然だろうけど、私まで進路が決定した事が不思議でならない。

まぐれって何度も起こるんだなあ……なんて思ったりして。

担任や両親は泣いて喜んでたけど、そんなに喜ぶことなのかはいまいち分からない。

だって通うのは私だし。

まあ、先生方が私の頭に合った大学を進めてくれた結果だと思えば不思議でもないか？

って事で、まぐれでも何でも進路が決まってしまうえば怖いものなんてないわけで。

私は今日もハッチを追い回してたりする。

「ハッチーっ！」

「また出ましたね、永田 夢さん」

「今日も愛してる♪」

「貴女を見ていると受験生だとは思えませんね」

やっぱり告白も流されてるけど。

「そんな事ないでしょ、期末頑張ったの見てない？」
「見てますよ、採点は僕がやってますから」

今回の試験は今までで最高点。

苦手な英語が、なんと八十点だったのだ。

そのおかげで初めて二百位以内に名前が載った。

「ちなみに、知ってる？」

「知りません」

「告白、ついに五千五百回到達」

「それはそれは。でも、お祝いはないですよ？」

「ちっ」

先に言われてしまっただけは何も言えない。

「その調子で今後もモチベーションを維持して下さいね」

「ハッチへの愛のモチベーションは常に維持してるよ、ってか永遠に維持できる」

「……勉強のお話です」

「だよねえ」

ハッチは溜め息を漏らして私に背を向けた。

「ハッチ、大好き」

「はいはい」

「本当に好きなんだよ？」

「はいはい、僕も生徒さん全員大好きですよ」

やっぱり今日もハッチはつれないのだった。

二学期も終わり、冬休みに突入。

しかし、受験生に休みなんてものはない。

何度も言うが、この学校は進学校。

当然の事のように毎日補習という名の授業がある。

まあセンター試験も近いし、仕方ないんだけどね。

学校が閉められるのは二十九日から三日まで。

それ以降は始業式前でも補習という名の授業が待っている。

そしてそのままセンター試験に突入し、そのあとには卒業認定試験。

軽くノイローゼになりそうだよ。

でも、まあ……前回同様、八十点越えの成績で何とか百五十位にまで順位を上げた私。

凄くない？

やればできる子じゃん、私って。

「頑張ってるね、夢」

「うん、頑張ってるよ」

掲示板の自分の名前をちょっと誇らしく思えたりして。

「本当に頑張ってますね、永田 夢さん」

背後からハッチの声が聞こえた。

「ハッチ、会いに来てくれたの？」

「いえ、偶然通り掛かっただけです」

「だよねえ」

「はい」

いつもと変わらない流し方だけど、今日のハッチはちょっとだけ機嫌が良さそうだった。

「ハッチ、百五十位って凄くない？ ハッチも少しは喜んでくれる？」

「それは喜んでますよ、教科別順位で最下位だった永田 夢さんが八十点以上の点数を取れるようになったんですから」

一言多いよ……。

素直に私を喜ばせてくれないあたりがハッチらしいけど。

「本当、こうやって順位が上がってくれと私の苦労も報われたって思えるわ」

感謝してます、本当。

神様仏様望様。

二月に入ると、三年フロアも何だか少しは穏やかな空気に変わっていた。

半数以上の進路が決まっているからだろう。

残りの少数は国立とかランクの高い所を目指している人達だ。推薦もセンターも撃沈して、焦っているように見える。

そういう人からすると、私みたいなのは見てるだけで腹が立つよううで。

最近では三年フロアでハッチに声を掛けると睨まれる。だから、三年フロアではおとなしくしておくことにした。

「ハッチみくっけ」

以前兎小屋のあった、現在の花壇の前でハッチを見つけた。

「おや、永田 夢さん。こんにちは」

「何してたの？」

「何でもありませんよ」

「……ここ、兎小屋があったんだよね」

ハッチは何も答えない。

「私さ、入試の日にここでウサギと遊んでるハッチを見たんだ。兎に話し掛ける声も見つめる眼も優しくて……そんな眼を、声を……私だけに向けて欲しいって思った。多分、その瞬間からハッチの事が好きなんだと思う」

「……そう、ですか」

「合格発表の日にね、ここに来たら会えるかもって思ったけど、ここには兎もハッチもいなかった」

「そうですね」

兎は校内に乱入してきた野良犬に襲われて死んじゃったって掃除していたおじさんが言ってた。

「兎を埋葬した人が林田先生っていう人だって掃除のおじさんが言ってる、お墓の場所も聞いて行ってみた。でも、そこには男の人が居たんだ。ボサボサの頭で皺くちやのスーツ着た人」

そう、ボサボサの頭で皺くちやのスーツ着て、ちょっと猫背の男の人。

それがハッチだった。

「何だか声も掛けられなくてその日は諦めた。で、入学式の次の日もう一回行ってみようと思って階段を下りてたら」

「ボールが飛んできましたか？」

「そう……あの時ハッチが庇ってくれて無傷で済んだ」

ハッチの右目の横にある一筋の傷はその時にできたものだ。

ハッチの掛けていた眼鏡のヨロイかテンプルで切れてしまったんだと思う。

「あの時は僕も驚きましたよ」

「私が告白したから？」

「そうですよ。僕は今まで生徒さん達に告白された事はありませんからね」

「あの告白も本気だったんだよ？」

「はいはい」

ちよつと暗くなっていた空気がいつものように軽いものに変わっていく。

「あと少しで卒業ですねえ」

「ハッチに会えるなら留年でも良かったんだけど、ハッチに嫌われたくないから体育祭の後は必死に勉強したよ。親とか石ちゃんが褒めてくれるより、ハッチにおめでとうって言って欲しかった」

「そう言えば、言ってますでしたね。おめでとうございます」

ついでのように言われた言葉でも嬉しかった。

「でも、永田 夢さん。御両親も担任の先生も本当に貴女を想ってるんです、そういう言い方は感心しません」

「でも……」

「でも、じゃありません」

「……ごめん」

「大学の合格祝いに、ジュースを御馳走して差し上げますよ」

ハッチはズルイ。

告白すると流すくせに、気まぐれに私を甘やかす。

だからいつまでも、ハッチを諦められないんだよ。
ねえハッチ、分かってる？

夢一〇（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

次回更新……明日の予定、です。

夢一10

私が嫌がっても時間は進んでしまう。

一番迎えたくなかった卒業の日。

私は胸に花を付けて皆と一緒に体育館でボーっと前方を眺めていた。

来賓の挨拶やら校長先生の話がダラダラとお経のように聞こえる。静まり返った体育館には微かに鼻を吸る音も聞こえた。

私はまだ泣かない。

泣かないためにも横は向けない。

ハッチが居るから。

ハッチに会えるのも今日で最後だと思おうと泣けてくるから。

だから、今日は朝からハッチを避けた。

式の前から泣きたくなかったから。

昨日の晩もたくさん泣いた。

ママに呆れられるほどに。

でも、仕方ないじゃん。

本当に好きなんだから。

会えなくなるのが悲しくないわけがない。

ハッチは英語の先生というだけ。

望は友達だからこれからだっていくらでも会える。

だけど、私とハッチを繋ぐものなんか何もない。

本当に終わっちゃうんだよ。

卒業と共に……。

「三年二組、クラス代表……永田 夢さん」
「はい」

石ちゃんの声が私の名前を読み上げる。

今朝、石ちゃんにクラス代表で卒業証書を受け取ってくれと言われた。

学級委員の望は卒業生代表挨拶があるし、何よりも校長先生からの御指名でもあったそうだ。

私は返事をして立ち上がり、横に並ぶ先生方の前で立ち止まり深々と頭を下げた。

そして、校長先生の立つ舞台に向かい、二組全員分の卒業証書を受け取る。

三十人分の卒業証書はトレーに乗せられていて想像以上に重かった。

十クラスもある生徒全員の名を呼んでいたら何時間掛かるかわからない。

クラスごとに代表者がいて卒業証書を受け取るのがこの学校の決まりだ。

もう、終わりなんだ……。

「貴女のお蔭で楽しい三年間でした。これからその明るさと素直

さを失わないで大人になって下さい」

校長先生が笑顔で私の頭を撫でる。

「校長先生、ズルイよ、反則だよ……泣くの我慢してるんだからそういう事言わないでよ……」

目頭が熱くなる。

私は俯きながら校長先生に深々とお辞儀をして正面の階段を下りた。

まっすぐ前を向いて、笑顔で下りようと思ったのに……できなかつた。

席に戻る際、石ちゃんにトレーを預ける。

「偉い偉い、卒業証書に涙も鼻水も付いてないな」

「付けるわけじゃないじゃん」

石ちゃんも校長先生みたいに私の頭を撫でて席に戻れとばかりに背中を押した。

「はい、ハンカチ」

席に戻ると望が苦笑しながら私にハンカチを差し出した。

「ありがとう」

「何だかんだ言って、皆あんたの事気に入ってるのよ。先生方は」
「問題児だからでしょ」

「それもあるけど、この進学校ではありえない崩壊キャラみたいだ

し」

何それ？

「あとで写真撮るんだからあんまり泣かないでよ。不細工顔を記念に残したい？」

「嫌」

「だったら楽しい事考えなさい」

「無理」

「じゃ、不細工顔を残せ、馬鹿夢」

顔を上げると、望の鼻の頭は少し赤くて、目も充血していた。

「望も泣いてんじゃん」

「目薬よ」

私は望の顔を覗き込んで少しだけ笑った。

卒業式が終わって、皆で写真を撮って、パパとママは帰って行った。
た。

っていうか、先に帰らせた。

私は賑わう校庭を背にして屋上へと向かう。
最後に思いつき振られて帰るためだ。

校舎内はあまり人がいないせいで静かだった。

校庭からの声が聞こえてくるだけ。

そして私が階段を上る足音が大きく響く。

今日でこの学校とも、ハッチともお別れだ。

私は卒業証書の入った筒をギュッと握って屋上の重たい鉄のドアを開けた。

そこには誰もいない。

フェンスに歩み寄って校庭を見下ろすと、たくさんの人の姿が見えた。

卒業式って何でみんな地味な格好してるんだろう？

制服に紛れている保護者も同系色で見分けもつかない。

時々淡い色のスーツを着た人がいるけど、ほとんどが黒や紺。

「変なの……」

校庭を眺めながら独り言のように呟く。

ってか、独り言だけど。

「何が変なんですか、永田 夢さん？」

背後から聞こえてきた声に振り返ると、ハッチが立っていた。

いつもと違ってぴしっとしたスーツを着ている。

ワイシャツもネクタイもちゃんとアイロンが掛かっている。

「何か変。ハッチが凄く整った格好してる」

髪も少し切ったみたいで目元が露になっている。

「僕だってこういう時はちゃんとした格好をしますよ」

「だよね。保護者の人たくさんいるし、変な格好出来ないよね」

自分の上履きまで目線を下げて小さく笑う。

これで最後。

「ハッチ」

「はい」

「卒業したよ？」

「おめでとうございます」

ハッチの声は相変わらずだ。

「ハッチ」

「はい」

「この間も言っただけど、入試の日に一目惚れだったんだ」

「入学式の翌日にそう仰ったような気がします？」

「あの時は二度目惚れ」

「そんな日本語ありませんよ」

ハッチがクスツと笑う。

「本当に好きなの。ずっと三年間ハッチしか見えなかった」

「そうですか」

「うん、ハッチが好きなの、ハッチだけが好きなの」

「永田 夢さん」

私の視界にハッチの愛用しているサンダルが入って来る。

「最後にしましょう」

ハッチの言葉に私は肩を震わせた。

「最後……？」

「いつまでもこのままじゃ辛いでしょう？」

ハッチなりの優しさなのかもしれない。

「そう、だね……」

「告白は最後にして新たな一步を踏み出して下さい」

私は大きく深呼吸をして顔を上げた。

すぐ傍にハッチがいる。

「林田 俊哉さん。三年前の入試の日、兎と遊んでいた貴方に一目惚れました。あの時の兎に向ける言葉も眼差しも、私だけに向けて欲しいって思いました。兎のお墓の前で泣いていた貴方を見て心が綺麗な人なんだって思いました。入学式の次の日、飛んできたボールから庇ってくれた時に好きだって気持ち溢れちゃいました。毎日告白しても好きって気持ちが大きくなって、溢れて……まだまだ伝え足りないけど、本当に好きなんです。卒業したから生徒ではなくなりました。中退もしなかったし、最低条件はクリアできたと思います。私と付き合ってください」

最後の方は声が震えた。

もう告白も出来ないと思ったら涙が溢れた。

ハッチから溜め息が漏れる。

「It's my defeat.」
「え？」

涙で濡れた顔を上げると、ハッチは苦笑した。

「意味分かりますか？」

「分かりません」

「では質問を変えましょう。今の告白、何回目だかお分かりですか？」

「五千九百六十三回」

「御苦勞様でした」

五九六三、ごくろうさん……。

ハッチ、年齢詐称してない？

オヤジだよ、その語呂合わせ。

でも、ハッチはニツコリと微笑んで。

その意味が分からなくて首を傾げると、その顔が近付いてきて。

え？　　と思った時には唇が重なって……。

「僕の負けです、本当に貴女には敵いませんね」

「え？　　今、キスした？　　どういう……」

「そこまでお馬鹿だとは思いませんでしたよ」

溜め息混じりにハッチが呟いて、私はギュッと抱き締められた。

これって……そういう事、だよな？

今日、この瞬間から……私達は教師と生徒じゃなくて、普通の男女として新たな一步を踏み出した。

「ハッチ、大好き♪」

「はいはい」

でも、私の告白はまだまだ続く。
きっとこれからも……一生、ね。

| F i n |

夢一10（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

そして最後までお付き合い下さってありがとうございます。

たくさんの方々の応援のお蔭で最後まで突っ走れました。

また、他の作品でお会いしましょう。

ありがとうございました♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2553f/>

十人十色の恋愛事情

2010年11月23日17時14分発行